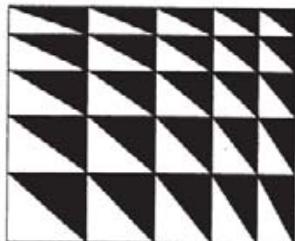


# モノグラフ・高校生'82

## vol.7 高校生活をふりかえって ——大学生たちの意見——

©1982(株)福武書店 教育研究所／加藤智福・賀川雅子・渋谷周子  
奈良教育大学教授 深谷昌志・武藏大学教授 武内清・千葉大学助教授 明石要一  
三井情報開発研究員 田中雅文



### 目次

調査の目的 ..... 2

本報告書の要約 ..... 3

#### 第I章 大学進学まで

- 1 サンプルの概要 ..... 4
- 2 進学のプロセス ..... 6
- 3 進学情報の入手 ..... 8
- 4 入学後の気持ち ..... 12

#### 第II章 高校生活と高校教育の評価

- 1 高校時代の生活行動 ..... 16
- 2 高校生活は楽しかったか ..... 18
- 3 大学生からみた受験勉強の意味 ..... 22
- 4 大学生からみた高校教育の意味 ..... 24

#### 第III章 高校生活と大学生活の関連

- 1 高校時代の勉強 ..... 33
- 2 高校時代のクラブ・部活動 ..... 36
- 3 高校時代の読書体験 ..... 38
- 4 高校時代の異性とのデート ..... 39
- 5 高校時代のテレビ視聴 ..... 40

#### 第IV章 大学と将来

- 1 大学の効用 ..... 42
- 2 職業の可能性 ..... 46
- 3 幸福感 ..... 50

#### 第V章 高校生活の意味

- 1 高校生活の延長に大学生活が ..... 54
- 2 数量化を使って ..... 55
- 3 人間性豊かな高校生活を求めて ..... 61

資料 調査票見本・集計表 ..... 62





## 調査の目的●

「モノグラフ・高校生」では、これまでさまざまな角度から、高校生たちの生活や意識を探ってきた。しかし、その結果はトータルとしてみると、暗さに包まれていたような思いがする。

授業に関心を持てない、あるいは、未来に希望を抱けない、そして、友だちの間で孤立している……である。

そうした高校生たちと比べ、大学生の姿は、少なくとも就職の季節を迎えるまでの間は、底抜けに明るい。アメリカの大学のように、予習や復習に追われることが少ないので、クラブやアルバイト、そして、授業、スポーツ、マージャンなどに、自分の時間を自由に使うことができる。

学生たちが自覚しているかどうかはともあれ、彼らは生涯の中で、二度と訪れることがない自由の時を楽しんでいるような印象を受ける。勉強にあけくれた3年、もしくは6年間の年季があけ、とり戻したつかの間の自由を楽しんでいるのであろうか。

そうした大学生たちが、高校生活をどう評価しているのか。そして、彼らにとって、高校生活がどんな意味を持っていたのか。それを考えようとしたのが、本報告書である。

サンプルの項で触れるように、大学生といっても、所属している場に、大きな開きが存在するので、調査対象の選択に苦慮した。それだけに、今回の結果から、どの程度の一般化をはかれるか疑問を感じないではないが、そうした問題は、今後さらに追跡調査を行って検討していくつもりである。

なお、本報告書の作成は、高校教育研究会の検討を経たが、執筆分担は以下のとおりである。

深谷昌志(奈良教育大学教授) I章、V章

明石要一(千葉大学助教授) II章

武内 清(武藏大学教授) III章

田中雅文(三井情報開発研究員) IV章

昭和57年10月

奈良教育大学教授

深谷 昌志

## 本報告書の要約●

●高校生たちは、入試の難易度を手がかりとして、進学先を選んでいる(P.9 図1)。入学後、進路選択の誤りに気づいている者も多い。

●もう一度、高校を受けられるとしたらの間に、7割の者は、出身高校を受験すると答えている(P.25 表19)。そうした意味では、出身校に対する愛着心が認められるが、そうした気持ちを成り立たせているのは、授業の質ではなく、友とのふれあいのように考えられる(P.19 表14)。

●大学生たちは、自分の高校生活を、授業をきき、テレビを見、そして、クラブ活動をしただけと評価している。それだけに、もう一度高校生活をくりかえすことができるなら、スポーツをしたり、本を読んだりする人間的に豊かな生活をしたいと考えている (P.28 図9)。

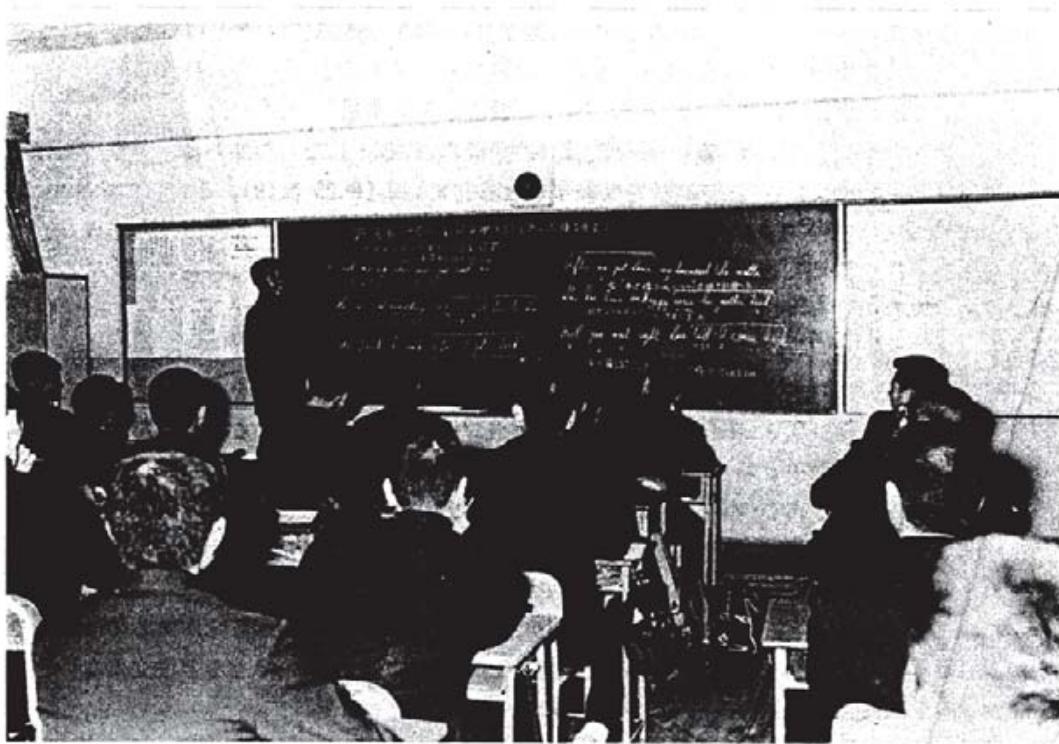
●受験勉強に、がまん強さを育てるという意味があるのは否定できないが、そこで覚えた知識は社会生活に、ほとんど役立たないと思っている(P.23 表17)。

●高校生活をどう過ごしたのかは、大学生活の過ごし方と密接に関連している。例えば高校の頃、授業を熱心にきいていた生徒は、大学進学後も、大学への適応が早い(P.21 図6-(a)(b))。

●8割を超える大学生は、大学生活をよい思い出ができるという程度に考え、職業面との関連を否定的にとらえている(P.43 表23)。もっとも、大学に充足感を持っている者は職業面での効用を認めている(P.48 図19)。



# 第Ⅰ章 大学進学まで



## 1. サンプルの概要

高校生活を「灰スクール」となぞられたのは、20年ほど昔の話であろうか。この時期は、高校生は体を中心に、心も含めて、成熟が進んでいる。そして、すでに子どもとは言えない年齢に入っている。しかし、まだ一人前のおとなではない。そのうえ、進学や就職を控え、不安定な境遇下にある。

そうしたいわば「境界人」としての高校生の意識については、この「モノグラフ・高校生」でも、さまざまな角度から分析を進めてきた。

その過程の中で、高等学校という教育機関

は、子どもたちの人間形成に、どのような機能を果たしているのか疑問を感じ始めた。生徒たちにとって、高校は、大学進学、または、就職までの通過機関ではないのか。

しかし、そうした感じ方は、おとなたちの印象で、現在の生徒たちは、高校生活にわれわれと違った意味を見い出しているのかも知れない。そこで、大学生を対象にして、高校生活についての評価を求める計画をたてた。

ひとくちに、大学生と言っても、国立、私立の違いもあれば、学部による差も大きい。そのうえ、居住地区の開きも無視できない。

と言って、いくつかの特定の大学の学生たちの意見では一般化をはかりにくい。

そこで、今回の調査では、福武書店のモニターをしている大学生たちに協力を求めるにした。添削や模試などで定評のある福武書店では、高校時代、会員であった者が大学へ進学する

と、キャンパス情報を伝達したり、勉強の仕方を教えてたりするレポーターとなり、その後も、さまざまな形で、コンタクトをとりつづけている。そして、その数は、数万人を超え、当然のことながら、進学先は全国にちらばり、学部もほとんどすべての学部をカバーしてい

表1 サンプル構成

(%)

性 別	男 子	52.1	女 子	47.9
進 学 先	國立大	40.7	私立大	41.2
	公立大	5.0	短 大	9.6
	文 學	19.9	法 学	7.6
所 属 学 部	教 育	16.2	理 学	5.1
	工 学	12.2	家 政	4.2
	經 濟	9.5	農・水	3.8
学 年	1 年	42.1	3 年	20.4
	2 年	34.1	4 年	3.4
現 役	現 役	96.3	一 浪	3.2
			二 浪	0.5
住 居	自 宅	51.4	アパート	26.2
	寮	10.2	その他	12.2

表2 サンプルの出身高校

(%)

設 置 別	国公立	84.4	私 立	14.5	その他	1.1
課 程	普 通	84.5	職 業	14.6	その他	0.9
設 立	明 治	37.1	大 正	13.0	昭和29年まで	26.2
	昭和30年代	8.7	昭和40年代	15.0		
進 学 率	100%	8.0	40%以上	7.2		
	80%以上	61.3	20%以上	3.9		
	60%以上	16.6	20%未満	2.8		
一学年の 生 徒 数	250人以下	9.0	401~450人	31.7		
	251~300人	7.0	451~500人	13.4		
	301~350人	9.6	501人以上	8.2		
	351~400人	21.1				
所 在 地	北 海 道	3.3	近 畿	25.7		
	東 北	5.7	中 国	7.7		
	關 東	23.7	四 国	4.2		
	北 陸	4.6	九 州	8.9		
	中 部	16.2	その他	0		

る。したがって、モニターという制約はあるにせよ、全国規模で、大学生の意識を探るには、適切なサンプルのように思われた。

そこで、郵送により、アンケート用紙を発送し、回収する方法をとった。ただし、回収率が7割を超えたため、その中から3分の1抽出して5042をサンプルに定めた。

サンプルの構成は、表1に示すとおりで、所属学部は予想どおり、大きなちらばりを見せた。こうした意味では、全国の大学生を網羅した印象を受けるが、表中で、気になるのは、現役で入学した者が96%を占める事実であった。したがって、今回の結果は、大学生の中でも、現役で、大学へ入った者の意見というような限定をつけて考えておく必要があるのかも知れない。

なお、サンプルの出身高校は、表2のとおりだが、進学率の高い高校の卒業生が多いのを除くと、それほど目につく傾向は認められない。

## 2. 進学のプロセス

まず、一般的に、彼らがどういう形で大学進学をしたのかを探ってみよう。概要是、表3に示したとおりだが、結果を要約すると、

- ①受験先を決めたのは、高校3年になってから(71%)
- ②実力相当のところを選び(41%)
- ③そして、高3に入ってから、本腰を入れて、勉強を始め(83%)
- ④午前1時すぎまで、平均4時間ぐらいは勉強し、睡眠を6時間にしてがんばった
- ⑤そして、まあまあの大学へ入学でき
- ⑥今は、その大学へ入れてよかったと思っている(81%)

となる。

大学受験を目指しているのであるから、高2の段階から、受験体制に入っているのではと思っていた。しかし、受験に対する立ち上がりが、予想外に遅いのに、意外な印象を受けた。とくに、高3の2学期から勉強にサポートをかけた者が25%と、4分の1に達しているのには驚かされた。

確かに、超一流といわれる大学へ進学するには、それなりの努力が必要で、高3の2学期からでは、まにあうはずもあるまい。しかし、大学進学をトータルとしてとらえた時は、進学そのものが大衆化しているだけに、

「高3に入ってから、実力相当の学校に目標をしほり、勉強を始めても、それなりに合格できる」のかも知れない。

考えてみると、「実力相当の大学」を目指す限り、合格できる大学を見い出せるのが、大学入試の実態なのであろう。

入試地獄などという言葉の割に、全体としての印象は、それほど深刻でないような気がする。

このモノグラフ・シリーズの中学生版「モノグラフ・中学生の世界」vol.11で、「高校進学」をテーマに分析する機会があった。その結果によると、高校進学を控え、中3の生徒の内で、「勉強に気持ちを集中できない」と思っている者が9割、「このところ、疲れた」と感じている者が7割と、精神的な疲労を訴えている者が多かったが、その割に勉強時間は平均3時間(中3の11月)、24時就寝と、受験勉強へ打ち込む姿は稀薄であった。

つまり、「やらなければ大変だ。勉強をしなければ」と思いつつ、実態は空回りしているように思えたが、今回の調査についても、それと同じ印象を受けた。

なお、勉強に本腰を入れた時期についてのクロス集計結果を表4に示したが、属性による開きは、ほとんど認められなかった。

表3 進学の一般的な状況

(%)

第一志望か	第一志望	47.0	第一志望でない	53.0
受験校をいつ 決めたか	高校以前	5.3	高3	1学期 20.7 2学期 29.6 3学期 20.4 その他 4.0
	高1	5.8		(70.7)
	高2	14.2		
入学校は 学力からみて	高望み	とても 2.2 かなり 5.1 やや 14.3	21.6	やさしい かなり 10.0 とても 5.1
	実力相当	(41.3)		
本腰を入れて 勉強したのは	高校以前	0.2	高3	1学期 31.0 夏休み 21.7 2学期 25.3 3学期 4.6
	高1	2.3		(82.6)
	高2	13.6		
	その他	1.3		
受験勉強を がんばったか	がんばった	とても 7.4 かなり 23.8 やや 25.4	56.6	がんばら なかつた やや 9.6 あまり 26.1 ぜんぜん 7.7
生 活 時 間	毎日の勉強	1時間以内 2.2 2時間 6.6	3時間 21.7 4時間 (27.9)	5時間 23.5 6時間 10.5 7時間以上 7.6
	睡 眠	4時間以内 2.2 5時間 11.3	6時間 (35.4) 7時間 32.2	8時間 17.6 9時間以上 1.3
	就 寝	23時前 12.0 24時 32.0	1時 (33.4) 2時 16.0	3時すぎ 5.2 その他 1.4
入れて よかったです	よかったです	とても 26.6 かなり 27.5 やや 26.7	(80.8)	よくな かった やや 7.3 あまり 8.4 ぜんぜん 3.5

表4 受験勉強に本腰を入れ始めた時期

(%)

性 別	男 子	高2まで	高 3			その他の
			1学期	夏休み	2学期	
男 子	19.0		32.0	19.6	24.4	5.0
女 女	13.5		31.0	24.1	24.4	7.0
進 学 率	100% 80%以上 60%以上 60%未満	16.0 15.6 19.3 18.7	34.1 31.0 32.5 36.5	23.7 22.3 19.3 19.6	22.9 24.5 24.1 19.6	3.3 6.6 4.8 5.6
設 置 別	国 公 立 私 立 短 大	16.5 17.6 11.3	31.2 31.4 32.4	23.2 19.7 23.6	23.2 25.4 27.8	5.9 5.9 4.9

### 3. 進学情報の入手

7割の生徒たちは高3に入ってから、受験先を決めて、進学していく。もちろん、表5のように、①教育学部は、教師志望が固まっているためか、高校入学以前から、志望を決めている者が多い。②国立大学の志望者は、私立大学や短期大学入学者より、受験先を決めた時期が早いなど、それぞれの事情で、多少の開きが認められるが、全体としてみると、高3の1学期から2学期にかけて、志望校を

決めた者が過半数になる。

それでは、生徒たちは何を目安として、志望校を決定するのだろうか。図1、表6から明らかなように、

- ①入試の難易度
- ②過去の入試の傾向
- ③取得できる資格

を知っているだけで、①就職状況や②大学の学風、③学生生活などは「あまり」あるいは、

表5 受験する大学・学部を決めた時期

(%)

		高校以前	高校1年	高校2年	高校3年			その他
					1学期	2学期	3学期	
サンプル平均		5.3	5.8	14.2	20.7	29.6	20.4	4.0
性別	男子	4.3	5.7	14.4	23.1	26.5	22.6	3.4
	女子	6.5	5.7	14.0	17.9	33.1	17.8	5.0
課程	普通	5.3	5.6	13.6	21.0	30.1	19.9	4.5
	職業	5.1	6.5	17.8	17.8	28.1	22.4	2.3
進学率	100%	5.0	5.0	20.2	18.5	28.6	19.3	3.4
	80%以上	5.9	5.8	13.7	21.3	28.8	20.4	4.1
	60%以上	5.2	6.4	13.6	16.8	30.8	21.6	5.6
	60%未満	0	4.6	11.1	25.0	36.1	21.3	1.9
学部	法学	5.4	1.8	13.4	22.3	33.0	19.6	4.5
	経済	2.9	6.5	15.2	15.9	29.1	26.1	4.3
	文学	2.4	3.1	15.1	19.2	37.8	17.9	4.5
	教育	(13.9)	7.6	14.8	14.8	19.8	23.6	5.5
	理学	2.7	9.5	18.9	16.2	25.7	27.0	0
	工学	2.8	6.7	9.6	28.1	28.6	23.0	1.2
設置別	国公立	9.0	7.2	16.1	19.0	18.6	25.8	4.3
	私立	3.4	4.7	12.2	23.1	(38.4)	14.8	3.4
	短大	0.7	4.9	15.3	18.1	(38.7)	16.7	5.6

図1 大学のことを知っていたか

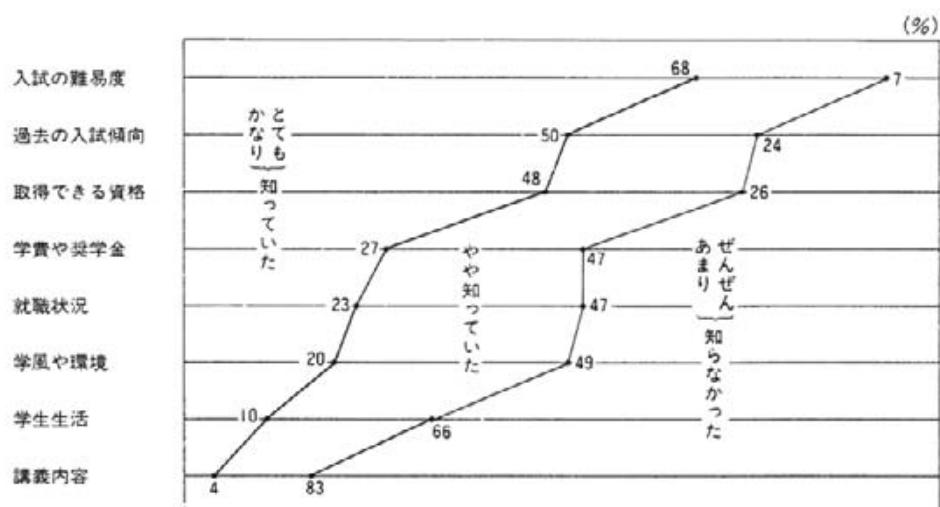


表6 大学のことを知っていたか

	知ていた			知らなかった	
	とても	かなり	やや	あまり	ぜんぜん
入試の難易度	18.2	49.9	25.2	4.5	2.2
	<u>68.1</u>			<u>6.7</u>	
過去の入試傾向	15.6	34.1	26.3	13.5	10.5
	<u>49.7</u>			<u>24.0</u>	
取得できる資格	21.1	26.9	26.2	14.5	11.3
	<u>48.0</u>			<u>25.8</u>	
学費や奨学金制度	7.6	19.4	26.4	24.4	22.2
	<u>27.0</u>			<u>46.6</u>	
就職状況	6.5	16.7	29.4	28.4	19.0
	<u>23.2</u>			<u>47.4</u>	
学風や大学の環境	4.4	15.8	30.9	29.9	19.0
	<u>20.2</u>			<u>48.9</u>	
学生生活	2.0	7.7	23.9	38.5	27.9
	<u>9.7</u>			<u>66.4</u>	
講義内容	0.7	2.9	13.8	33.9	48.7
	<u>3.6</u>			<u>82.6</u>	

図2 受験のさい参考にしたもの

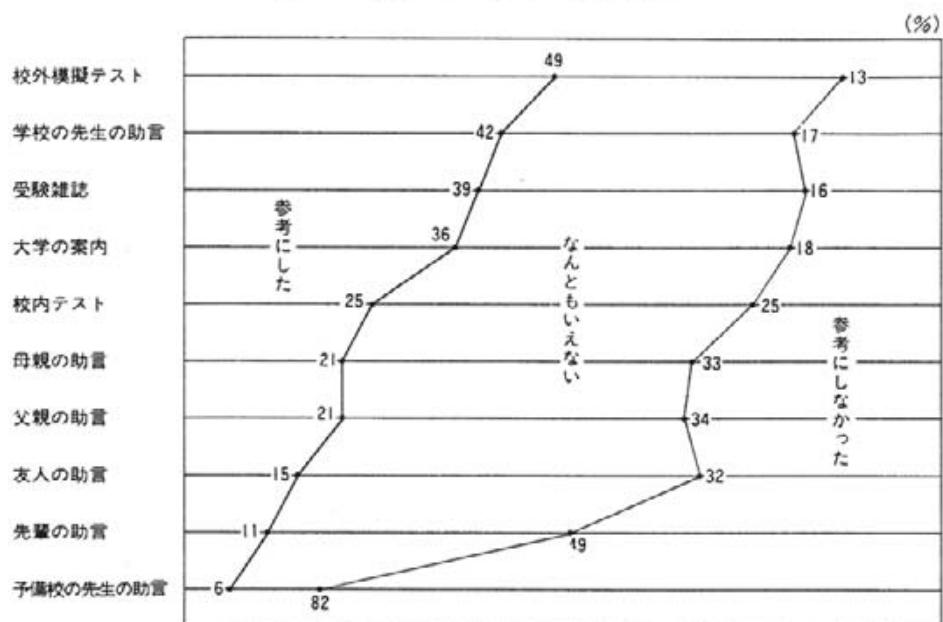


表7 受験のさい参考にしたもの

	参考にした			参考にしない		
	とても	かなり	やや	あまり	ほとんど	ぜんぜん
校外模擬テスト	17.0 49.4	32.4	25.6 37.3	11.7	6.4 13.3	6.9
学校の先生の助言	11.4 41.8	30.4	29.1 41.1	12.0	9.2 17.1	7.9
各大学の案内	10.0 36.4	26.4	31.8 45.7	13.9	7.8 17.9	10.1
受験雑誌の記事	8.7 39.1	30.4	36.0 44.6	8.6	7.5 16.3	8.8
校内テスト	7.2 25.3	18.1	27.8 49.7	21.9	13.2 25.0	11.8
父親の助言	6.3 21.1	14.8	25.6 44.5	18.9	12.8 34.4	21.6
母親の助言	5.7 21.0	15.3	26.9 45.8	18.9	13.2 33.2	20.0
友人の助言	3.1 14.8	11.7	30.8 53.0	22.2	12.6 32.2	19.6
先輩の意見や助言	2.5 10.5	8.0	21.3 40.5	19.2	17.7 49.0	31.3
予備校の先生の助言	1.7 6.4	4.7	5.6 11.6	6.0	4.3 82.0	77.7

表8 進学にあたり大事に考えたこと

(%)

	大事に考えた			大事に考えなかった	
	とても	かなり	やや	あまり	ぜんぜん
学科の内容が自分のしたいことと合っている	51.0 27.7 78.7		11.9	7.1 2.3 9.4	
自分の希望する仕事につける	32.9 24.5 57.4		17.1	16.2 9.3 25.5	
得意な科目で受験できる	27.8 31.8 59.6		18.9	13.3 8.2 21.5	
自分の学力に合っている	17.3 37.9 55.2		26.9	13.9 4.0 17.9	
就職するのに有利	19.4 21.5 40.9		23.7	22.5 12.9 35.4	
家から通える	16.0 17.0 33.0		14.0	15.2 37.8 53.0	
大学の雰囲気が好き	8.0 13.7 21.7		21.4	30.3 26.6 56.9	
優秀な教授陣	3.8 9.0 12.8		17.7	39.0 30.5 69.5	

「ぜんぜん」知らない者が、知っている者の2倍を上回っている。

つまり、理想はともあれ、大学についての情報を得ることなしに、入試の難易度を主たる基準にして、志望校を決定しているのが、進路選択の実態のように思える。

図2、表7によると、受験校を決定する時に、参考にするのは、

- ①校外模擬テストの成績
- ②学校の先生の助言
- ③受験雑誌の情報

だという。ここでも、テストの点数が最優先している。

高校入試の場合、普通科が大半を占めるから、テストの結果によって、生徒が輪切りにされる形となる。しかし、大学進学は学部の数が多いうえに、学科による開きもある。そのうえ、全国のどの大学でも受験できる。したがって、受験する大学の状況を知ることが、なにより重要だと思うのだが、残念ながら、自分の適性や個性を考慮するのはたてまえだけにとどまり、学力が唯一の基準として機能しているようである。

そうだとすると、大学進学後、進路選択の不適切さに気づく者が多いのではないだろうか。

## 4. 入学後の気持ち

表9に「もう一度大学受験をするとしたら、同じ学部を受験するか」の結果を示した。同じ学部を受ける率は54%と、半数強にとどまり、4割強が、他学部を受ければよかったと考えている。

もっとも、こうした場合、自分の進路が確定した後だけに、「隣りの芝生は青い」のたとえどおり、他の学部がよく見える心理が働くと思われる。「他の学部を受ければよかった」と考える割合が、ある程度を占めるのはやむをえない。しかし、それにしても、46%の者

が「そうした気持ちを抱いているのは、高すぎる数値のように思われてならない。

それでも医学部(67%)や芸術学部(67%)のような個性のはっきりとした学部へ進学した者は、同じ学部を目指す者が多いため、経済学部を中心に、教育学部や法学部では、他の学部を受ければよかったと思っている者の割合が高い。

そこで、念のために、他学部を受ける場合の学部名を挙げてもらうと、表10のとおりとなる。

表9 同じ学部を受けるか

(%)

① 医 学 66.7	④ 文 学 62.1	⑦ 教 育 54.5
② 芸 術 66.7	⑤ 工 学 59.2	⑧ 経 済 41.0
③ 理 学 63.1	⑥ 法 学 54.5	サンプル平均 53.6

表10 他の学部を受けるとしたら

(%)

現学部 \ 学受けたい学部	法学	経済	文学	教育	理学	工学	医学	芸術	その他
法学		5.9 (39.2)	7.8	11.8	2.0	11.8	3.9	17.6	
経済	21.7		(31.4)	13.3	4.8	7.2	7.2	1.2	13.2
文学	20.7	9.0		(28.0)	4.5	0.9	5.4	4.5	27.0
教育	14.7	2.8 (32.9)			11.9	3.7	6.4	14.7	12.9
理学	11.1	7.5	18.5	14.8		11.1	18.5	0	18.5
工学	6.8	16.4	8.2	12.3	23.4		15.1	2.7	15.1
医学	30.0	0	10.0	40.0	0	0		10.0	10.0
芸術	0	0	50.0	33.3	0	16.7	0		0

法学、経済、教育学部進学者の3~4割が文学部を受ければよかったと思っているのが目をひく。

しかし、図3から明らかなように、そうはいうものの、同じ文系、あるいは理系内部の選択がえが多く、文系から理系へ、あるいはその逆の場合は、1~2割の範囲にとどまっていた。

そこで、もう一步踏み込んで、「もう一度受験できるとしたら、今の大学を受験するか」を尋ねてみた。

表11のように、同じ大学へ入りたいと答えた者は、「やや」の20%を含めても、51%にとどまっている。表12でも、今の大学に入つてみたら、思っていたのよりよかったという評価は5割強で、「よくなかった」が半数にせまつ

図3 もう一度受験するとしたら

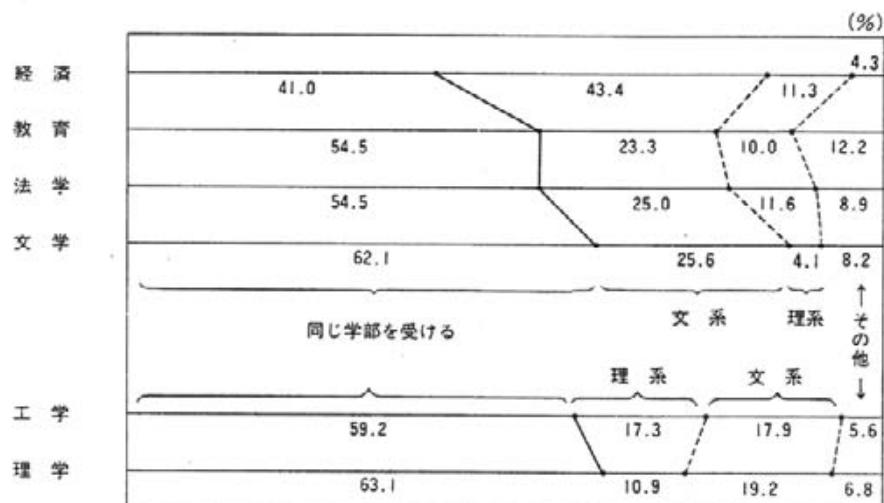


表11 もう一度受験するとしたら、今の大学へ入りたいか

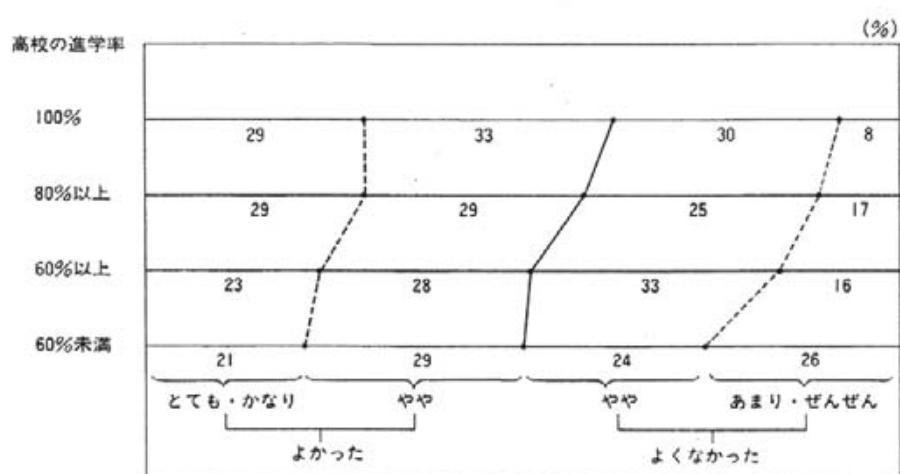
		入りたい				入りたくない				(%)
		ぜひ	できたら	やや	小計	やや	あまり	ぜんぜん	小計	
サンプル平均		16.0	15.5	19.8	51.3	14.2	20.9	13.6	57.7	
性別	男 子	16.1	15.0	20.5	51.6	13.4	20.7	14.3	48.4	
	女 子	16.3	16.5	19.4	52.2	14.8	21.8	11.2	47.8	
進出身学年の割合	100%	17.6	21.0	24.4	63.0	16.8	14.3	5.9	37.0	
	80%以上	17.0	15.7	20.2	52.9	14.0	20.4	12.7	47.1	△
	60%以上	16.0	13.2	18.4	47.6	11.6	26.8	14.0	52.4	△
	60%未満	10.2	16.7	20.4	47.3	13.9	23.1	15.7	52.7	△
設置別	国 公 立	19.2	17.2	20.6	57.0	14.4	18.4	10.2	43.0	△
	私 立	13.8	15.4	19.6	48.8	13.1	23.9	14.2	51.2	△
	短 大	14.8	9.9	16.9	41.6	14.1	25.3	19.0	58.4	△

表12 今の大学は考えていたよりよいか

(%)

		よかったです				よくない			
		とても	かなり	やや	小計	やや	あまり	ぜんぜん	小計
サンプル平均		8.4	18.4	29.5	56.3	26.6	10.1	7.0	43.7
性別	男子	7.9	17.6	28.9	54.4	27.7	10.0	7.9	45.6
	女子	8.8	19.1	30.0	57.9	25.8	10.1	6.2	42.1
進学率	100%	10.2	18.6	33.1	61.9	30.5	5.1	2.5	38.1 △
	80%以上	8.7	20.0	29.6	58.3	24.7	9.9	7.1	41.7 △
	60%以上	6.8	16.3	27.9	51.0	33.0	9.6	6.4	49.0 △
	60%未満	8.3	13.0	28.7	50.0	24.1	17.5	8.3	50.0
学部	法学	10.7	7.1	41.0	58.8	28.6	6.3	6.3	41.2
	経済	8.7	17.4	29.0	55.1	26.8	9.4	8.7	44.9
	文学	9.6	23.4	28.6	61.6	23.0	9.6	5.8	38.4
	教育	7.2	17.7	34.6	59.5	26.2	8.0	6.3	40.5
	理学	10.8	18.9	27.0	56.7	31.1	9.5	2.7	43.3
	工学	4.5	20.1	24.6	49.2	29.6	11.7	9.5	50.8
学年	1年	6.7	20.2	29.4	56.3	26.6	10.2	6.9	43.7
	2年	9.3	15.9	30.1	55.3	28.4	10.1	6.2	44.7
	3年	9.5	18.6	30.4	58.5	24.3	9.1	8.1	41.5
	4年	12.2	24.5	18.4	55.1	24.5	14.3	6.1	44.9

図4 出身高校の進学率×今の大学は考えていたよりよかったか



っている。

大学進学を夢みて、受験勉強を進めてきた。そして、あこがれの大学へ入れた。しかし、いざ入学してみると、思っていたほど、大学はすばらしいところではなかったというのであろう。

とくに、図4に要約したように、進学率の高い高校から受験した生徒——ということは、当然、ランクの高い大学へ入学できた層と考えられる——は、充足感を持つ割合が多いが、出身高校の進学率が下がるにつれて、大学への充足感が薄れてくる。

大学といっても、実態にかなりの開きが存在するのは否定しがたい。そして、大学に対する期待が大きかっただけに、失望感も強いのかも知れない。

大学人の一人として、学生たちの期待に沿えなかった大学のあり方に自戒の念を強く抱いたが、それと同時に、点数だけを目安に受験校を考える進学のあり方にも、問題が多い印象を受けた。

資料の読みとりをしているうちに、進学のあり

方まで考察が進んでしまったが、以下の章では、主題へ戻り、そうした大学生たちが、高校生活をどう評価しているのかを中心に分析を行いたいと思う。



## 第II章 高校生活と高校教育の評価



### 1. 高校時代の生活行動

大学生たちは、自分の高校時代を、学校では、熱心に授業をさき、クラブ・部活動をし、家ではのんびりとテレビを見ていたふりかえっている

この章では、高校時代どのような生活を送り、現在その生活をどのように評価しているのか、そして、もう一度高校生活を送ることができるとすればどのような生活を描いているのか、大学生からみた高校生活の意味を明らかにしていきたい。

大学受験を目指す高校生と言えば、禁欲的な生活を送り、ねじりハチマキで机に向かう姿が浮かぶ。ところで、現在の大学生は、高校時代どんな行動をとっていたのだろうか。高校生ならば体験したであろう行動体験の項目を12個あげ、彼らに評価してもらった結果が

表13である。表は、「よくした」「かなりした」数値を合わせて高い順に示してある。

予想どおり全体的に見て、高校時代の行動体験は乏しい。半数以上の者が体験した項目は「熱心に授業をきく」(59%)、「のんびりテレビを見る」(55%)ぐらいである。「映画を見に行く」(22%)や「友人と夜遅くまで語り合う」(14%)、それに「音楽会やコンサートへ行く」(13%)に至っては、体験したものは1~2割程度である。そして、「アルバイトをする」(6%)や「ディスコへ行く」(1%)の体験者は1割を大きく下回る。

こうして見ると、高校時代の生活は学校の

授業と家でのテレビ視聴という休息型の余暇行動が中心となっている。こうした高校時代の行動体験の乏しさは、彼らの勉強に費す時間を見るうなずける。大学受験に本腰を入れ始めた頃の勉強時間を調べてみると、1日に「3時間」勉強した者22%、「4時間」の者28%、「5時間」の者22%となっている。毎日「6時間以上」勉強したというつわものは18%と2割を割るもの、7割以上の者が3~5時間勉強にさいている(前掲表3)。

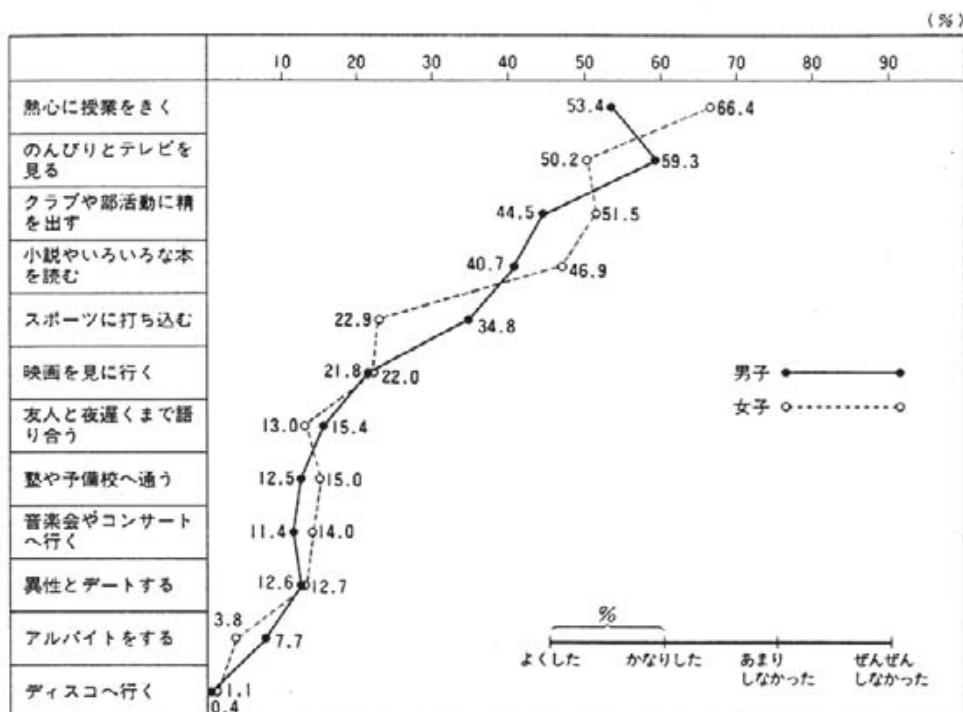
それでは、高校時代の行動体験は性別によってどうなっているだろうか。それを調べたのが図5である。図からわかるように、性差の

表13 高校時代の行動体験

(%)

	よくした	かなりした	あまりしなかった	ぜんぜんしなかった
熱心に授業をきく	12.8 59.3	46.5	37.6	3.1
のんびりとテレビを見る	17.5 54.8	37.3	37.8	7.4
クラブや部活動に精を出す	26.5 47.9	21.4	31.2	20.9
小説やいろいろな本を読む	16.9 43.4	26.5	45.8	10.8
スポーツに打ち込む	14.2 29.0	14.8	39.9	31.1
映画を見に行く	4.8 21.8	17.0	56.5	21.7
友人と夜遅くまで語り合う	4.3 14.1	9.8	41.7	44.2
塾や予備校へ通う	3.6 13.8	10.2	24.4	61.8
音楽会やコンサートへ行く	3.0 12.6	9.6	42.1	45.3
異性とデートをする	2.5 12.6	10.1	36.8	50.6
アルバイトをする	1.1 5.9	4.8	18.6	75.5
ディスコへ行く	0.2 0.7	0.5	5.1	94.2

図5 性別にみた高校時代の行動体験



ある行動体験とそうでないものとに分かれる。「映画を見に行く」から「ディスコへ行く」という行動体験の乏しい項目では、あまり性差が見られない。しかし、「熱心に授業をきく」から「スポーツに打ち込む」の行動体験は、男女によって異なる。

☆男子に特徴的な行動体験

○「のんびりテレビを見る」………59%

○「スポーツに打ち込む」…………35%

☆女子に特徴的な行動体験

○「熱心に授業をきく」……………66%

○「クラブや部活動に精を出す」…52%

○「小説やいろいろな本を読む」…47%

こうしてみると、女子は男子に比べて授業や部活動という学校の規範にあった行動を体験している。

## 2. 高校生活は楽しかったか

授業の楽しさは、学業成績や教師の熱意だけでなく、体育祭・文化祭などに対する高校の活発度にも規定される

高校時代は、学校で授業、そして帰宅後はテレビを視聴したという生活を中心であった彼らにとって、高校生活は果たして楽しかったのだろうか——。高校生活を「友だちと話している時」「クラブ・部活動」「先生との関係」そして「授業をきいている時」の4領域に

表14 領域別にみた高校生活の楽しさ

(%)

	とても 楽しかった	かなり 楽しかった	やや 楽しかった	ふつう ぐらい	やや 楽しくなかつた	あまり 楽しくなかつた	ぜんぜん 楽しくなかつた
友だちと話して いる時	35.9  71.6	35.7	15.3	9.4	1.5	1.8	0.4
クラブ・部活動	23.3  49.1	25.8	19.5	16.8	4.7	5.5	4.4
先生との関係	8.9  27.6	18.7	24.2	32.1	5.3	7.2	3.6
授業をきいて いる時	2.5  17.4	14.9	24.1	38.5	6.8	9.1	4.1

表15 どんな高校の出身者か

(%)

	とてもそう	かなりそう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
非行生徒のとても少ない学校	30.2  78.1	47.9	18.9	3.0
受験指導に熱心な学校	32.0  75.4	43.4	21.2	3.4
熱心に教える先生の多い学校	18.3  67.7	49.4	29.6	2.7
制服の着用の厳しい学校	36.9  65.2	28.3	19.6	15.2
クラブや部活動のさかんな学校	13.1  61.7	48.6	34.9	3.4
体育祭や文化祭などのさかんな学校	17.8  58.4	40.6	36.2	5.4
熱心に勉強する生徒の多い学校	13.8  57.1	43.3	38.2	4.7
校則などの厳しい学校	15.6  39.9	24.3	41.7	18.4

分け、それぞれの楽しさを尋ねた結果が表14である。

彼らが一番楽しみを見い出したのは、「友だちと話している時」で「とても」と「かなり」を合わせると、7割を超える。次が「クラブ・部活動」で49%とほぼ半数。それに対し、「先生との関係」が楽しかったと答えた者は、28%と3割を下回り、「授業をきいている時」は、17%と2割にも満たない。

このような授業や教師との関係に楽しみを見い出せず、友人との語らいが一番楽しかったという高校生活の評価は、今の高校生とほとんど同じである。

高校時代もっとも精を出したのが授業であったにもかかわらず、そこに楽しみを見い出した者が2割たらずということは、授業論の立場からすれば大きな問題を孕んでいる。しかし、ここでは問題の指摘にとどめ、少ない

ながらも教師との関係や授業が楽しかったと答えた者は、どんな人たちであるのかを明らかにしたい。当然ながらも学校においては授業が中枢を占めるので、授業に楽しさを見い出している者の要因を明らかにすることは今後の高校教育を考えるときの一助となるだろう。

ところで、授業中の態度は、彼らの出身高校や学業成績などの属性と結びついているだろうから、とりあえず、大学生はそれらに対してどのように評価しているか探ってみよう。

まず彼らはどんな高校の出身者なのだろうか。教育環境のよい学校を卒業したのだろうか。それを調べるために、例えば「体育祭や文化祭などのさかんな学校」などという学校を特徴づけた項目を8項目用意し、各々について評価してもらった。表15はその結果である。数値は傾向をはっきりさせるため「とてもそう」と「かなりそう」を合わせたものを示してある。

表を一覧してわかるように、「校則などの厳しい学校」(40%)を別として、ほとんどの項目が肯定的に評価されている。6割を超える者が認める出身高校の特徴を挙げると次のようである。

- 「非行生徒のとても少ない学校」……78%
- 「受験指導に熱心な学校」……………75%
- 「熱心に教える先生の多い学校」……68%
- 「制服の着用の厳しい学校」……………65%

#### ○「クラブや部活動のさかんな学校」…62%

こうした結果から、かなりの大学生は出身高校をめぐまれた教育環境であったとみている。そして、非行生徒がとても少なく、受験指導に熱心な学校であったと答えた者が、7割を超えていることは、大学受験にとっても適していた環境だったことにもなる。

次に彼らの小、中、高校時代の学業成績を調べてみよう。表16にその結果を示してあるが、「小学校高学年の頃」と「中学時代」に成績が「上位」にあったと答えている者は、57%、59%とほぼ6割に達する。これに「中の上」を加えると、小学校高学年82%、中学時代87%となり、ほとんどの者が勉強においてそれほどつまづきを味わっていないようである。すなわち、かなりの者が中学校までは「栄光の時代」を体験していたと言えよう。

それが、「高校1年の頃」や「高校3年の頃」になると「上位」の者がかなり減ってくる。すなわち、「上位」の者が3割前後となり、中学校時代のはば半数になる。これは本人たちの知的能力が高校に入ると減退したからではなく、知的に同じレベルの者が同じ学校に集中したため、やや位置が相対的に下がったと考えた方が、理にかなっている。

確かに高校になると、学業成績「上位」の者は減少してくるが、これに「中の上」の者を加えると、高1の頃で62%、高3の頃で75%と

表16 学年別にみた学業成績の自己評価

( % )

	上 位	中の上	中 位	中の下	下 位
小学校高学年の頃	56.7	25.3	12.4	3.8	1.8
中学時代	59.4	27.8	7.5	3.4	1.9
高校1年の頃	29.6	32.6	22.8	11.3	3.7
高校3年の頃	34.7	40.4	16.3	6.8	1.8

なる。かなりの大学生は、高校時代でもその学校ではいわゆる「できのよい生徒」に含まれていたようである。

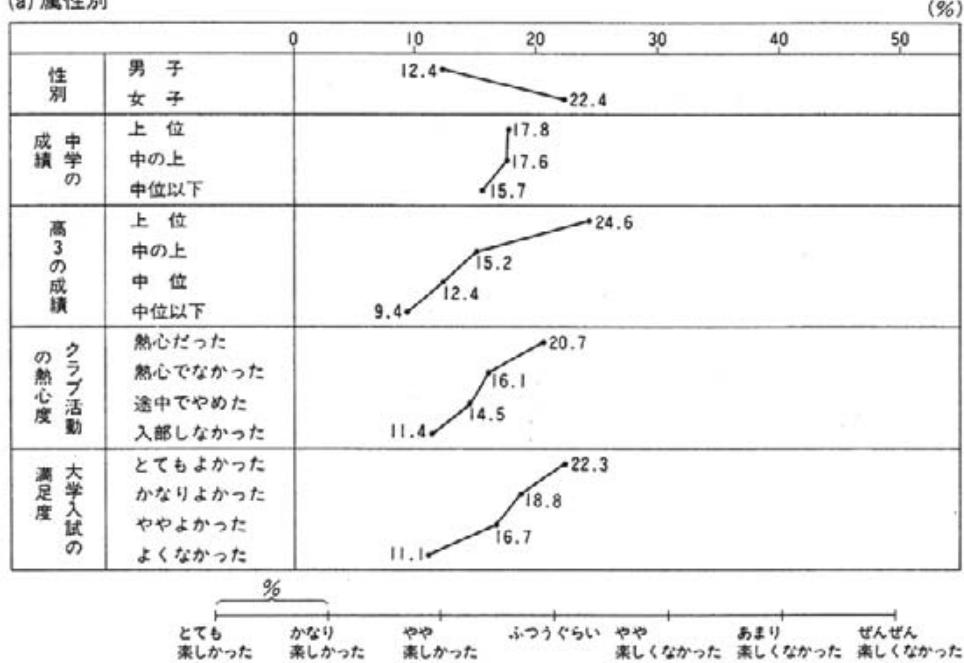
こうしてみると、対象となった大学生は小・中学校時代、「栄光の時代」を体験し、めぐまれた教育環境のしかも受験指導に熱心な高校へ入学し、そこでもそこそこの成績を修めていたことになる。

さて、そろそろ本題に入るとしよう。先ほ

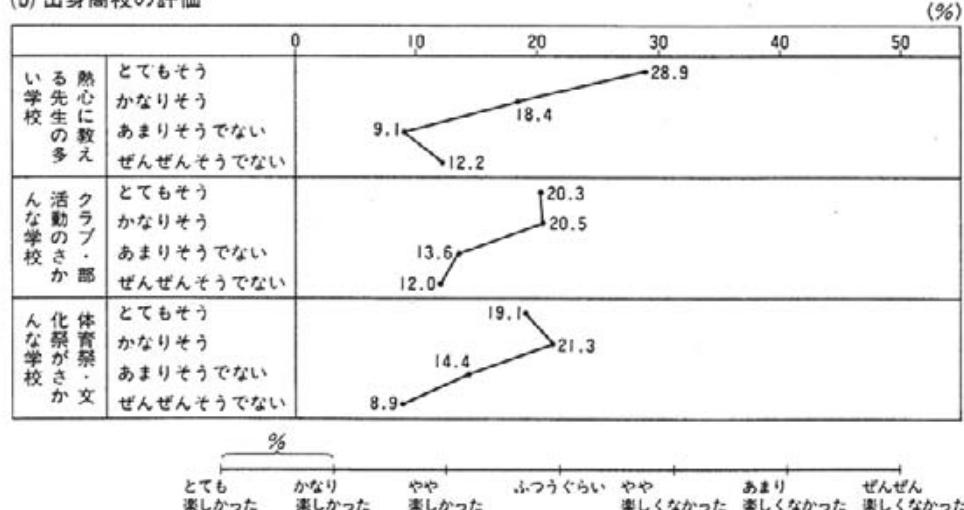
ど少し触れたように授業や教師との関係に樂しみを見い出す者は多くなかった。しかしづかながらそれらが楽しかったという大学生もいる。それでは高校の授業が楽しかったと答えた大学生はどんな人たちだろうか。それを調べたのが図6-(a)(b)である。これは高校の授業が「とても・かなり」楽しかったと答えた者と、大学生の属性（性別、中学校の成績、高3の成績）やクラブ活動への熱心さ、大学入

図6 授業の楽しさ

(a) 属性別



(b) 出身高校の評価



学時の満足度、それに出身高校の評価（熱心に教える先生の多い学校など）をクロスしたものである。

図からわかるように、「中学校の成績」は高校の授業の楽しさとあまり強い結びつきを示していない。しかし、「高校3年頃の成績」では成績が上位になるにつれて9%→12%→15%→25%と楽しかったと答える者が増加する。また同様のことが、「高校時代のクラブ活動の熱心度」や「大学入学時の満足度」についても指摘できる。すなわち、クラブに入部しなかった者より、熱心にがんばった者、そして入学した大学に満足しなかった者より満足した者の方が授業が楽しかったようだ。それから性別では男子(12%)より女子(22%)の方が楽しかったと答えている。

さらに出身高校評価の「熱心に教える先生の多い学校」では、12%→9%→18%→29%と「そう思う」と答えた者ほど授業が楽しかっ

たようである。これは、教師が授業に精を出し教材研究を深めると生徒が理解しやすくなるから、授業が楽しくなることはある意味では当然のことかも知れない。ところが、興味深いことに授業の楽しさとは直接に関係がないと予想される「クラブ・部活動のさかんな学校」や「体育祭・文化祭がさかんな学校」などにおいても、「そう思う」学校の出身者はほど授業に楽しみを見出している。

したがって、授業の楽しさは高校の学業成績や教える教師の熱意という予想されうる要因は言うまでもなく、本人のクラブ活動への熱心度、それに部活動や体育祭・文化祭などのさかんな学校という学校全体の活発度にも規定されていると言える。換言すれば、本人や学校が勉強以外の事柄にも力を入れ、学校全体が生き生きとした雰囲気をつくり出すならば、自ずと授業も充実したものとなり、樂しくなるであろう。

### 3. 大学生からみた受験勉強の意味

大学生たちは、受験勉強で覚えた知識は実社会ではほとんど役立たないと思うている。しかし、そこで養われた忍耐力は高く評価している

最近、「四当五落」や「灰色の高校生活」という言葉を耳にしなくなった。ということは、高校生にとって大学受験の重圧が軽減されたかというとそうでもない。一般的にある社会現象が突出すると、それを説明する言葉が生まれ、その社会現象が一定の地域、一定の期間持続して起きると、その言葉は流行する。そして、言葉が流行しなくなることは、その現象が消滅したか、それとも生じても目新しくなくなったかである。今の大学生たちにとって大学受験の勉強というものは、ちょうど後者にあたり、さほど特別なものと映っていないかったのであろう。しかしそのことを受験が生活のすみずみまで浸透していることとは別である。

大学生は高校時代、大学進学を目指してかなり受験勉強をしてきたのである。先にも少

表17 「受験勉強」の意味

(%)

	とても そう思う	かなり そう思う	やや そう思う	ややそ 思わない	あまり そう 思わない	ぜんぜん そう 思わない
学校の勉強をきちんとやっていれば、予備校へ行かなくても大学へ進学できる	38.4  67.6	29.2	14.6	7.2	7.0  10.6	3.6
受験勉強は勉強する態度が身につくし、忍耐力を養うので人生にとってプラスだ	13.8  39.5	25.7	33.7	8.4	12.7  18.4	5.7
受験勉強で覚えた知識は、社会生活を送るのに役立つ	2.8  10.9	8.1	22.2	17.7	31.2  49.2	18.0

し触れたが7割を超える者が1日に「3~5時間」勉強していた。そして就寝時刻は、「24時頃」が32%、「午前1時頃」が33%、「午前2時頃」が16%で、ほぼ7割に近い者が夜半過ぎから午前2時頃まで起きていた。したがって、睡眠時間は「6時間ぐらい」の者が35%でもっとも多い。これを加えて「7時間未満」の者は49%と約半数に達する。「四当五落」とまではいかないまでも高校時代は受験勉強に力を入れ、かなりの時間机に向かっていたのである。

それでは、彼らはエネルギーを注いだ受験勉強をどのようにみているのだろうか。それを調べたのが表17である。「学校の勉強をきちんとやっていれば、予備校へ行かなくても大学へ進学できる」という意見に対して「かなり」と「とてもそう思う」を加えると68%となり、7割に近い者が、その意見に肯定的である。ところが、「受験勉強で覚えた知識は、社会生活を送るのに役立つ」という意見を肯定する者は「かなりそう思う」を加えても11%と1割強である。すなわち、受験勉強の知識の効用はせいぜい大学受験までだ、と考えているようである。

それから、二つの意見の中間に「受験勉強は勉強する態度が身につくし、忍耐力を養うので人生にとってプラスだ」がある。この意見を肯定する者は、「とても」「かなり」それから「やや」を合わせると73%となる。

こうしてみると、大学生からみると希望する大学への近道は、予備校などに通ったりして特別な受験勉強をするより、高校の授業に精を出すことだということになる。そして、受験勉強で覚えた知識は実社会においてはとるに足らないものであるが、そのことで身についた習慣や忍耐力は以後の生活にとって役立つと思っている。

ところで、「学校の勉強をきちんとやっていれば希望の大学へ進学できる」とは学校の教師がしばしば口にすることである。しかし、かなりの大学生がこうした意見に賛同しているとは意外であった。大学進学を目指す高校生にとって高校は、大学受験の資格をとる機関にすぎず、受験勉強は予備校などの学校外の機関に依存しているのでは、と予想したがそうでもない。彼らにしてみると、大学受験といっても特別な勉強方法をとらなくてもよく、毎日の授業に全力を集中すれば自ずと

道は開けるという。

こうした大学生の大学進学に対する高校教育の高い評価は、彼らのうちかなりの者がめぐまれた教育環境(とりわけ受験勉強に)の高校出身者であり、しかも授業を熱心にきいていた

事実を考えると当然のことかも知れない。図は割愛するが、出身高校を高く評価する者はど、大学進学に対する高校教育の評価が高くなっている。

## 4. 大学生からみた高校教育の意味

7割を超える大学生が、もう一度高校生活を、しかも母校でという条件つきで望んでいる

大学受験という関門をくぐりぬけ、大学生生活を味わっている彼らは、もしチャンスがあればもう一度高校生活を送りたいと思っているのだろうか。それともあのような禁欲的で苦痛な生活は二度と送りたくないと思っているのだろうか。

表18を見てみよう。もう一度高校生活を「ぜひ送りたい」と答えた者は約20%。そして「できたら」は33%、「やや」は22%で、送りたい気持ちの強さを別にすると、7割を超える者が高校生活をもう一度送りたいと望んでいる。

しかも、彼らは卒業した高校へもう一度入学したいのである。表19にその結果を示してある。母校へ「ぜひ入学したい」と答えた者は、34%と3割を超える。「できたら」は20%、「やや」は16%で、7割に近い大学生が卒業した高校で過ごしたいと言う。

それでは、母校で高校生活を送りたいと望

表18 もう一度高校生活を送りたいか

(%)

ぜひ 送りたい	できたら 送りたい	やや 送りたい	やや 送りたくない	あまり 送りたくない	ぜんぜん 送りたくない
19.9	33.3	22.4	6.5	11.1	6.8

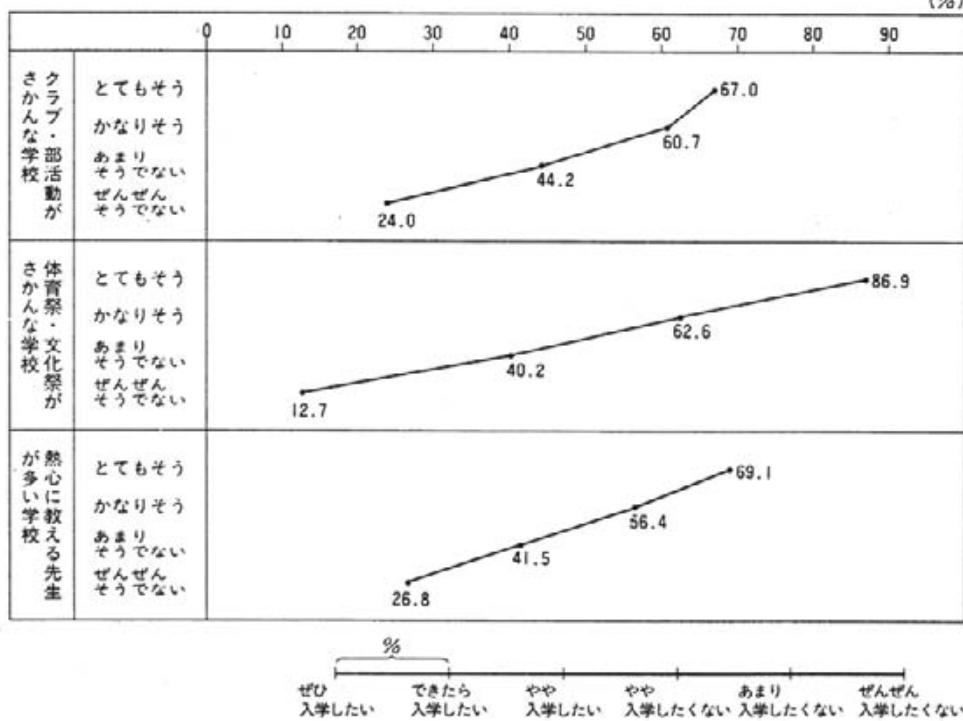
表19 自分が卒業した高校に入学したいか

(%)

ぜひ 入学したい	できたら 入学したい	やや 入学したい	やや 入学したくない	あまり 入学したくない	ぜんぜん 入学したくない
33.6	19.7	15.5	7.5	13.4	10.3
<hr/>			68.8		

図7 出身高校の評価×母校への入学希望

(%)



む大学生はどんな人たちであろうか。まず出身高校の評価との結びつきを調べたものが図7である。数値は「ぜひ」と「できたら」入学したい者を加えた割合を示している。図が示すように、どの項目とも、母校を高く評価する者ほど入学したい割合が増加している。例えば、「体育祭や文化祭がさかんな学校」の評価では、数値は13%（ぜんぜんそうでない）→40%（あまりそうでない）→ 63%（かなりそ

う）→87%（とてもそう）と増える。

ということは、高校は体育祭や文化祭を活発にし、部活動も奨励し、そして熱心に教える教師が増えれば、卒業生は古巣でもう一度高校生活を送りたい気持ちを抱くようになることを示す。

次に、大学生の属性を中心にして、母校へ入学したい比率を調べたものが図8である。性別ではどちらかといえば男子(53%)より女

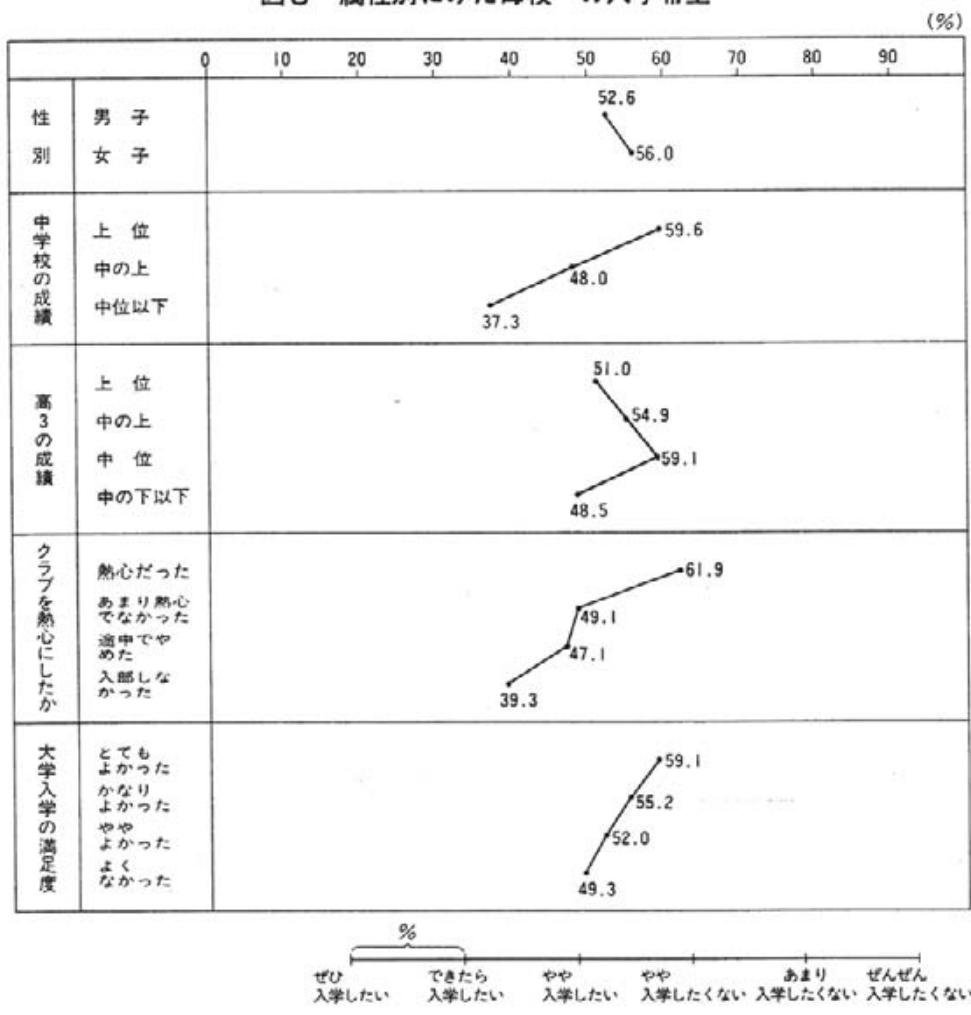


子(56%)の方が、そして、中学校の成績では、数値37%(中以下)→48%(中の上)→60%(上位)が示すように成績が上位の者ほど母校への入学を望んでいる。同じ学業成績でも高校時代の成績では有意差がみられない。

また、高校時代クラブ活動を「熱心にした者」(62%)は、「入部しなかった者」(39%)より、それから大学入学時に「とても満足した」者(59%)は、「満足しなかった」者(49%)より、母校への入学を強く望んでいる。

こうした結果から、もう一度卒業した高校への入学を望む大学生は、中学時代よい成績をとり、めぐまれた教育環境の高校へ入学でき、そこでクラブ活動を熱心にやり、学業成績もそこそことり、希望する大学に入学できた者と推測できる。

図8 属性別にみた母校への入学希望



もう一度高校生活を送るチャンスがあれば、男子は「友人と夜遅くまで語り合いたい」、女子は「小説やいろいろな本を読みたい」などの行動を欲求している

さて、かなり多くの大学生はもう一度高校生活をしかも母校でという条件つきで望んでいるが、彼らはそこでどのような行動をしたいのだろうか。高校時代の行動体験と同じ項目を用意し、行動欲求を調べたものが表20である。

表を一覧してわかるように、ほとんどの項目において行動欲求が強い。一番強い行動欲求は「小説やいろいろな本を読む」で「ぜひしたい」が65%、「かなりしたい」が29%で、合わせると9割を超える。そして6番目にある「映画を見に行く」までは8割以上の者が、そうした行動をしたいと思っている。

他方、もう一度高校生活を送った時でも依

表20 もう一度高校生になった時の行動欲求

(%)

	ぜひしたい	かなりしたい	あまりしたくない	ぜんぜんしたくない
小説やいろいろな本を読む	64.9 93.7	28.8	5.0	1.3
クラブや部活動に精を出す	55.8 87.7	31.9	9.5	2.8
友人と夜遅くまで語り合う	47.0 84.9	37.9	12.5	2.6
スポーツに打ち込む	44.9 81.6	36.7	12.9	5.5
音楽会やコンサートへ行く	38.1 81.2	43.1	14.2	4.6
映画を見に行く	37.6 81.0	43.4	15.9	3.1
異性とデートをする	38.2 77.2	39.0	18.0	4.8
熱心に授業をきく	31.8 75.4	43.6	20.5	4.1
アルバイトをする	19.0 44.9	25.9	35.2	19.9
のんびりとテレビを見る	13.1 44.1	31.0	45.9	10.0
ディスコへ行く	7.1 20.7	13.6	29.5	49.8
塾や予備校へ通う	3.4 11.8	8.4	28.3	59.9

然として欲求の弱いものがある。それは、「ディスコへ行く」(21%)や「塾や予備校へ通う」(12%)である。

さて、この表の概略的な記述はこれくらいにして、今もう一度高校生活を送った時の行動欲の特徴をはっきりさせるために、高校時代の行動体験と比較してみよう。そのために作成したのが図9である。

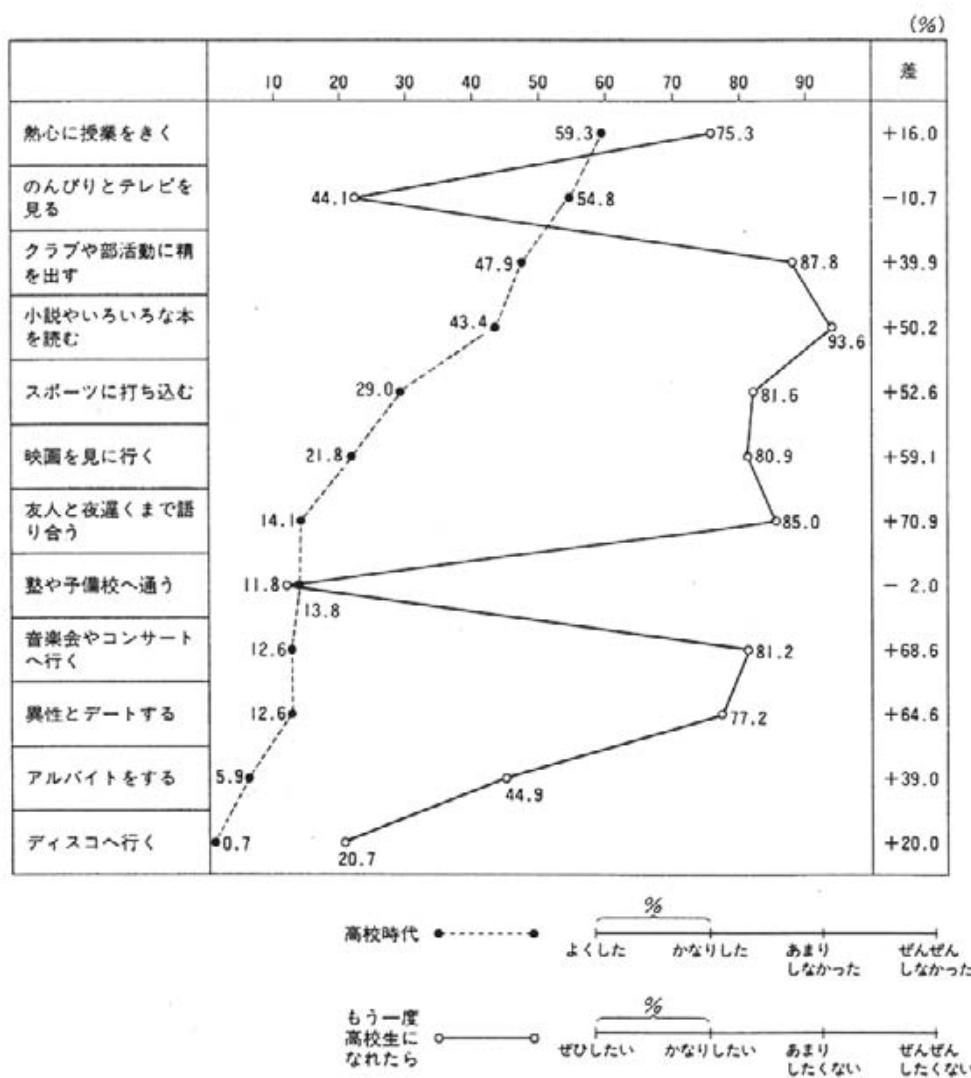
図からわかるようにもう一度高校生になった時、行動欲求が低下する行動がある。それは「のんびりテレビを見る」(55%→44%)と

「塾や予備校へ通う」(14%→12%)で、その他の10項目はすべて高校時代の体験より行動欲求の方がまさっている。

今、両者の「差」の大きいベスト5を挙げると次のとおりである。

- 1位…「友人と夜遅くまで語り合う」(71%)
- 2位…「音楽会やコンサートへ行く」(69%)
- 3位…「異性とデートをする」(65%)
- 4位…「映画を見に行く」(59%)
- 5位…「スポーツに打ち込む」(53%)

図9 高校時代の行動体験と大学生の行動欲求の比較



これら5つの行動は、人間的な接觸を求めるものと、行動半径の広い余暇活動に属するものであり、高校時代に体験することが少なかったものである。したがって、もう一度高校生活を送るチャンスがあれば、今度こそそれらの行動にエネルギーを注ごうとする。このことは「のんびりとテレビを見る」行動欲求が低下していることからもうかがえる。

この図からもう一つ興味深い結果が読みとれる。それは「塾や予備校へ通う」欲求行動は $14\% \rightarrow 12\%$ へと低下しているにもかかわらず、「熱心に授業をきく」欲求行動は $59\% \rightarrow 75\%$ へと増加する。これは高校時代の行動体験では一番多かった行動であった。それでも高校時代の熱心さにまだ不足感を抱いているのであろうか。かなりの大学生が、もう一度高校生になれた時、授業を熱心にきこうとしている。

こうして、大学生が高校生となった時の行動欲求は、人間的なふれあいや行動半径の広い余暇行動、それに授業に対する熱心さというように、広範囲にひろがっている。

それでは、こうした行動欲求は何によって規定されているのであろうか。まず性別による行動欲求の違いを調べると、次のとおりになる。

#### ☆男子に特徴的な行動欲求

- 「友人と遅くまで語り合いたい」
- 「スポーツに打ち込みたい」
- 「異性とデートをしたい」
- 「アルバイトをしたい」

#### ☆女子に特徴的な行動欲求

- 「小説やいろいろな本を読みたい」
- 「音楽やコンサートへ行きたい」
- 「映画を見に行きたい」
- 「熱心に授業をききたい」
- 「塾や予備校へ通いたい」

男子は友人や異性との接觸に代表されるように人間的なふれあいを求めていた。これに対して女子は読書や授業、それにコンサートなどのまじめな行動にエネルギーを注ぎたいと思っている。このように行動欲求は性によ

って異なる。

では次に、行動欲求は高校時代の行動体験によってどのように変化するのか探ってみよう。すなわち、高校時代に多くの行動体験を



すれば、欲求行動は低下するのか、それとも体験をすればするほど欲求が強まるのか、を明らかにしようと思う。図10は、それを調べたものである。

図からわかるように、高校時代の行動体験と、もう一度高校生活を送った時の行動欲求は強い結びつきを示している。例えば「熱心に授業をききたい」項目の「ぜひしたい」比率は、数値 $9\% \rightarrow 17\% \rightarrow 35\% \rightarrow 72\%$ と高校時代の行

動体験が多くなるほど増加している。また、「塾や予備校へ通いたい」項目は、「ぜったいしたくない」で集計してあるが、ここでも数值 $14\% \rightarrow 14\% \rightarrow 35\% \rightarrow 80\%$ が示すように、予備校などへ通ったことのない者ほど、通いたくない。

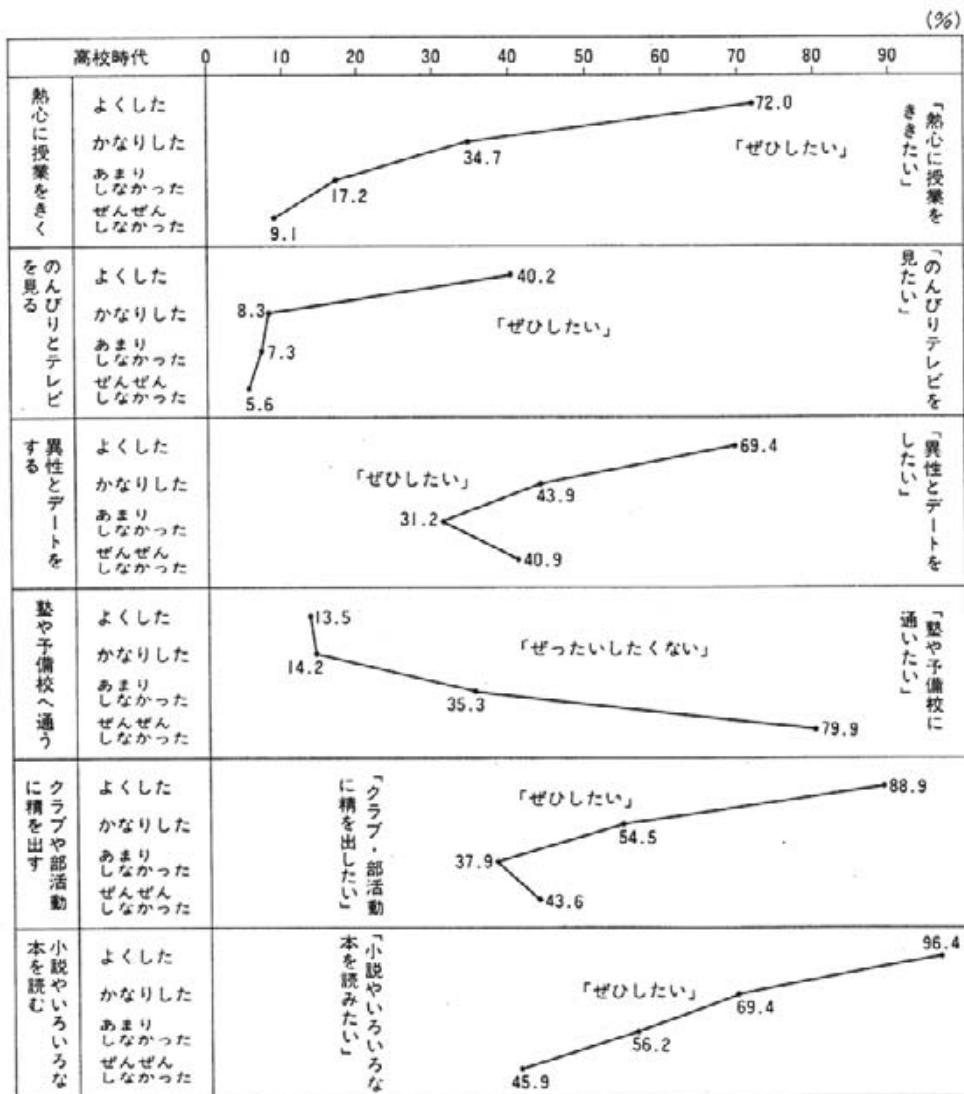
こうしてみると、行動欲求は、性差による違いをみせながらも、高校時代にどのくらいその行動をしたかという体験の差に規定されている、とも考えられる。すなわち、かつて体験をしておくとそれが痕跡として残り、も

う一度チャンスがあった時それを追体験しようとする気持ちが強く表れると言える。逆に高校時代の行動体験が乏しいと同じ行動への欲求が生じてこないのである。

全体的に見て、大学生の行動欲求は、多くの行動において過去の行動体験を大きく上回っているのであるが、その底流には行動体験と行動欲求が正の相関をなしている。したがって、高校時代の行動体験が大きな意味をもってくるのである。

それでは、大学生は、今後の高校教育はど

図10 高校時代の行動体験×もう一度高校生活を送るとしたら



のような方向を目指せばよいと思っているのであろうか。高校教育に対する意見調査という手法を借りながら、彼らの考えを浮き彫りにしたのが表21である。

「文化祭や運動会などを、もっと積極的に奨励すべきだ」という意見に対して、「とても賛成」と答えた者44%、「かなり賛成」は33%で両方を合わせると8割に近い大学生がその意見に賛成している。そして、「高校では学力別のクラス編成をすべきだ」(18%) や「テストの結果を公表し競争意識をつけさせるべきだ」(10%)、それに「高校は基礎学力をつけさせる場とし、受験の学力は予備校などにまかせるべきだ」(5%) という意見に賛成する者は、きわめて少数である。逆に強い反対の態度を示す者が4割から6割ほどになる。こうした結果は、これまでの分析からある程度予測できたことである。したがって、大学生からみた高校教育の方向は次のようなものとなるであろう。

高校生をおとな扱いにした服装や髪型の自

由化には意見が分れるものの、大学受験の準備は高校にまかせるというように、学校教育の効果に信頼を寄せている。しかし、大学受験のためや授業の効率を高めるために学力別のクラス編成の試みや競争意識をかきたてる方策については疑問を抱いている。

そして、高校は文化祭や運動会などの学校行事にもっと力を注ぎ、生徒に行動体験の場を提供することを望んでいる。

大学生からみた高校は単なる通過機関としては映っていない。高校時代は確かに行動半径が狭く、授業と部活動に精を出し、家庭ではのんびりとテレビを見るという生活に終わるところはある。しかし、学んだ高校の教育環境はめぐまれたものであり、生まれ変わってもその母校で学びたいと思っているほどである。そしてそこでは、幅広い行動を体験しようと思うと共に、勉強にもこれまで以上にエネルギーを注ぎたいと考えている。高校生活は彼らの胸の中に青春の一コマとして刻まれているのである。

表21 大学生からみた今後の高校教育の方向

	とても 賛成	かなり 賛成	やや 賛成	やや 反対	かなり 反対	まったく 反対	(%)
文化祭や運動会などを、もっと積極的に奨励すべきだ	44.0 <u>33.4</u> 77.4		19.1	2.6	0.4 <u>0.5</u> 0.9		
高校生をおとな扱いし、髪型や服装をもっと自由にすべきだ	10.8 <u>17.4</u> 28.2		29.4	25.8	10.9 <u>5.7</u> 16.6		
高校生ともなると、学力の差がひらくから学力別クラス編成をすべきだ	6.1 <u>11.7</u> 17.8		22.2	19.0	19.4 <u>21.6</u> 41.0		
テストの結果などを公表し、競争意識を持たせるべきだ	3.4 <u>6.2</u> 9.6		20.5	27.6	20.4 <u>21.9</u> 42.3		
高校は基礎学力をつけさせる場とし、受験の学力は予備校などにまかせるべきだ	2.1 <u>2.7</u> 4.8		9.2	27.3	26.9 <u>31.8</u> 58.7		

## 第III章 高校生活と大学生活の関連



本章では、高校時代の生活の送り方と大学時代の生活の送り方との間には関連があるのかどうかを検討する。換言すれば高校時代の経験が大学生活に反映するのかしないのか、するとしたらどのように反映するのかを検討したい。

大きな二つの考え方がある。日本の学歴社会状況を考えると、とにかく高校時代は勉強して、大学に入ってから遊ぶというパターンが好ましいという考え方がある。これは高校時代と大学時代の生活を切り離した考え方である。もう一つ別の考え方として、高校時代は知的な側面ばかりでなく、情緒的な側面や体力の発達の段階だから、勉強ばかりしていては一面的な発達をとげてしまい好ましく

ない。大学に入ってからいくら勉強以外の側面でがんばっても遅すぎるという見方がある。これは高校生活と大学生活は密接な関連があるという見方である。以上の二つの考え方のどちらが正しいか、今回のデータで確かめていくことにする。

具体的な手続きは次のようなものである。高校時代の行動体験を尋ねた中から、「熱心に授業をきく」「のんびりとテレビを見る」「異性とデートする」「小説やいろいろな本を読む」「クラブや部活動に精を出す」の5つ項目を選び出し、それぞれの行動体験の有無が、大学時代の生活——大学入学動機、大学生活満足度、大学生としての自己像——にどのように影響しているかを見ていくのである。

# 1. 高校時代の勉強

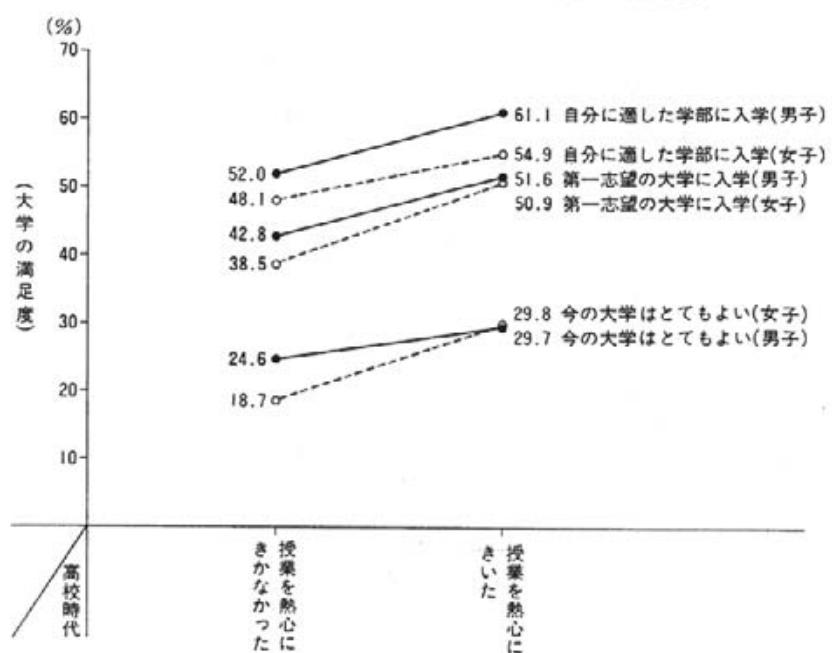
高校時代の勉強に対する熱心さ・まじめさは、大学生活の過ごし方や自己像に大きな影響を与えていている。

高校時代の学校の授業に対する態度は「熱心に授業をよくきいた」13%、「かなり熱心」47%と熱心派が59%、「あまり熱心にきかなかった」38%、「ぜんぜん熱心でなかった」3%と不熱心派が41%いる（前掲表13）。

この高校時代の勉強に対する熱心さ・まじめさは、大学生活にどのように反映しているのであろうか。

まず、大学入学に関する満足度に関して見てみよう。図11に見るように、大きな差となって表れている。すなわち男女とも高校時代にまじめに勉強した者は、そうでない者に比べ、「第一志望の大学に入学し」「自分の能力や好みに適した学部に入学し」「今の大学に入つてとてもよかった」と満足度が高くなっている。

図11 高校時代の勉強×大学・学部選択の満足度



る。高校時代に、勉強に関し不まじめな姿勢をとっていた者は、大学入学の時大きなつけを払わされることになる。

次に、大学生活の各領域に対する満足度を見たのが図12である。はっきりと高校時代の授業に対する熱心さ・まじめさが大学生活への満足度に対して影響を与えていることがわかる。もちろん背後に本人の生来の性格や態度の影響も働いていることであろう。

高校時代に授業に対し熱心であった生徒は、大学に入って大学の雰囲気、講義内容、先生との接触に満足しているだけでなく、クラブ活動、友だちとのつきあいといった大学生活のインフォーマルな側面に対する満足度も高くなっている。高校時代の不勉強から不本意な大学・学部に入学した生徒は、大学生活の各領域に対して自然に消極的になり、不満足になるのであろう。

大学での異性とのつきあいに関しては、興味深い性差が表れている。男子では高校時代

に勉強に熱心だった生徒は、大学での異性関係に満足度が低くなる。つまり男子の勉強熱心は必ずしも異性に評価されていないのである。女子ではその逆となる。つまり女子は高校時代に勉強に熱心なまじめな生徒の方が大学に入り異性の人気を得ているのである。

第3に、高校時代の勉強が、大学生の若者としての自己像へどう影響しているかを見てみよう。自己像の質問は「あなたは、いまの若者としてどんなタイプですか」として、「私はいまのヤングの中ではナウなルックスを持っている（カッコイイ）方だと思う」「運動神経はかなりいい方に入るだろう」など16項目に関して尋ねている。

図13-(a)は、「とても」と「ややそう思う」の回答を加え、男子に関して、高校時代に授業に熱心だった者とそうでなかった者で差の出た項目を図示したものである。これを見ると男子の場合、高校時代に授業熱心でまじめだった者は、大学生としての自分を読書家、努

図12 高校時代の勉強×大学生活の満足度(男女別)

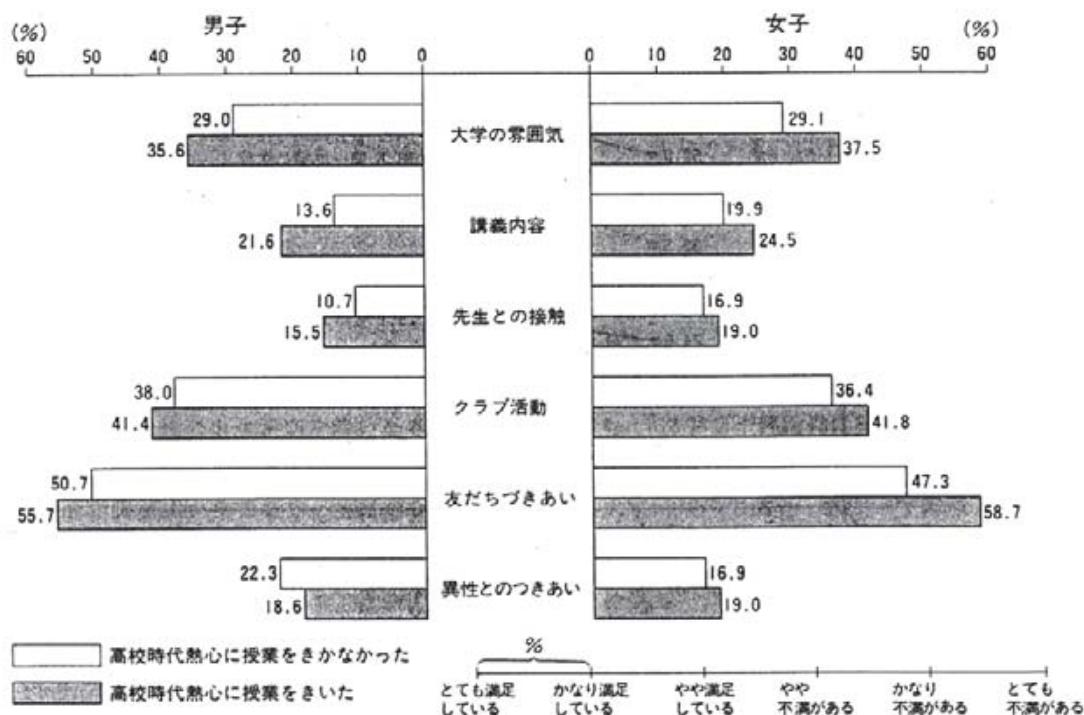
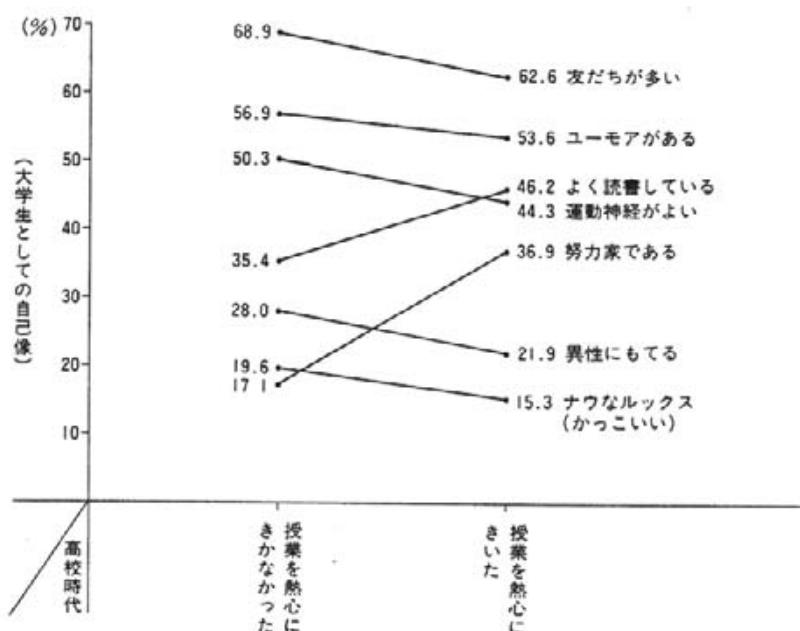
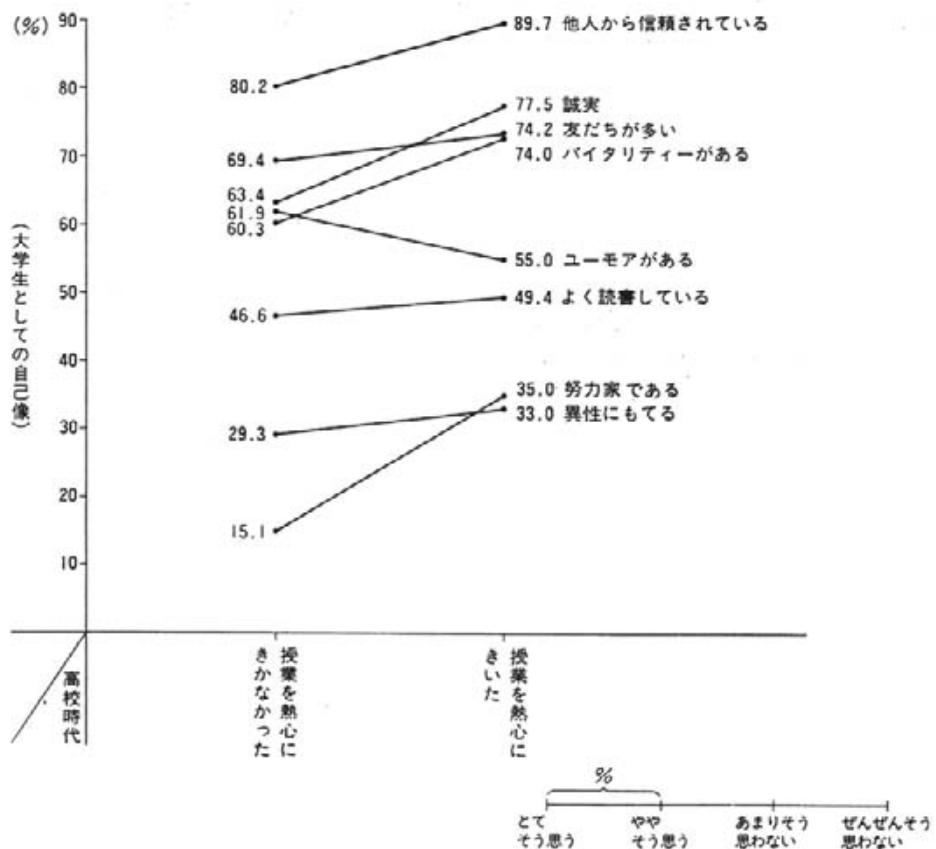


図13 高校時代の勉強×大学生としての自己像

(a) 男子



(b) 女子



力家として位置づけることはできるものの、かっこよさ、ユーモア、運動神経のよさ、異性に対する人気、友だちの多さといった面で、自分は劣った人間だと自己評価せざるをえない傾向があることがわかる。逆に高校時代に勉強に対し、不まじめであった者は大学生の自分を努力家や読書家ではないものの、かっこよく、ユーモアがあり、スポーツマンで、同性・異性の人気を得ていると自己評価することができる。勉強家、まじめであることは、別のある能力(運動能力、ユーモア等)を抑圧するという関係にあるといってよいだろう。

それに対して、女子の場合は少し違っている。図13-(b)に見るように、女子の場合高校時代に授業熱心で、まじめだった者は、ユーモアに欠けると自己評価するものの、その他の面では高校時代に不まじめだった者に比べ、大学生としての自分の能力や性格を高く評価

する傾向がある。つまり、高校時代に授業熱心だった女子生徒は大学に入り、他者からの信頼、誠実さ、友だちの多さ、バイタリティー；読書家、努力家、異性からの人気、すべてにわたって自信を持つようになっている。

このように、高校時代の勉強に対する熱心さ・まじめさは、男女とも大学入学や大学生活への満足度によい影響を与えている。しかし男子に関しては、勉強が人間の幅を多少狭くし、若者としての自分に自信を喪失させる働きをしていることも確かである。一方、女子に関してはよい影響のみを与えていたといつてよいであろう。これは、女子に対する勉強の期待が男子に比べ過酷ではないせいもある。いずれにしろ、今回のデータからは、高校時代の勉強に対する熱心さ・まじめさは、その後の大学生活や自己像に大きな影響を与えていたことが明らかになった。

## 2. 高校時代のクラブ・部活動

高校時代のクラブ・部活動の経験は大学入学、その後の大学生活への満足度を高め、自信をつける

高校時代に「クラブや部活動に精を出す」ことを「よくした」(27%)、「かなりした」(21%)というクラブ熱心派は48%、一方「あまりしなかった」(31%)、「ぜんぜんしなかった」(21%)のクラブ不熱心派は52%と、半々に分かれている。性別では、クラブ熱心派は、男子45%、女子51%と女子が多く、逆にクラブ不熱心派は、男子55%、女子49%と男子が多い(前掲表13、図5)。

この高校時代のクラブ・部活動での活躍・非活躍は、大学生活にどのような影響を与えているのであろうか。

まず、大学入学に関する満足度を見てみると、図14に示されているように、男女とも高校時代にクラブ・部活動を熱心にやったの方が、第1志望の大学に入学し、自分に適した学部に入学し、また今の大学に入ってよかったと感じている。このことからもクラブ

図14 高校時代のクラブ活動×大学進学に対する満足度

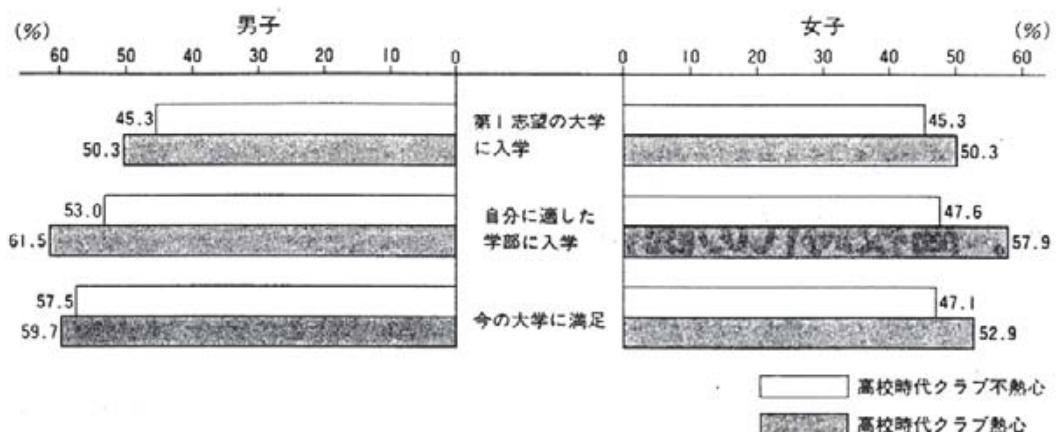
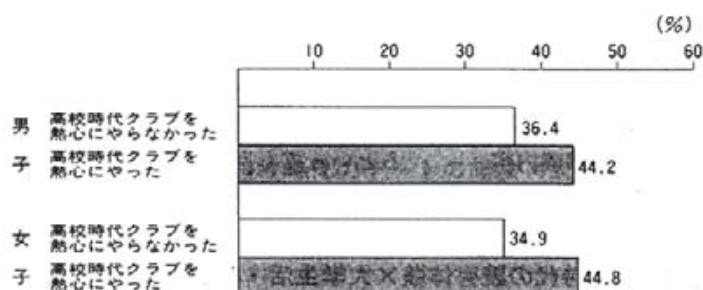


図15 大学のクラブの満足度



活動は、大学入学に関して妨げになっているというようなことはなく、高校生のやる気や積極性を養う場として機能していると言えよう。

次に、大学生活への満足度への影響を見てみよう。まず、大学のクラブ活動への影響が挙げられる。図15に見るよう男女とも、高校時代に部活動を熱心にやった者は、大学に入ってからも部活動に打ち込みやすく、満足を得る機会も多くなっている。しかし、高校時代に部活動経験のなかった者は、体力的・技術的な側面、あるいは人間関係的側面でも遅れをとり、大学での部活動に不適応を起こす場合が多いようである。

その他の大学生活の領域で見ると、図表は省略するがクラブ熱心派が不熱心派を上回る満足度(「とても」+「かなり」)は、男子では

「講義内容」(熱心派22%、不熱心派15%、以下同じ)があり、女子では「教授との接触」(21%、15%)、「異性とのつきあい」(36%、28%)がある。このように高校時代のクラブ体験は、大学生活への満足度を高める働きをしていると言ってよいであろう。

第3に、高校時代の部活動の経験が、大学生の若者としての自己像の形成にどのように働いているかを見てみよう。クラブ不熱心派が熱心派を上回る積極的な自己像は全然ないのに対し、熱心派が不熱心派を上回る自己像は多数ある。男子では、「運動神経がよい」(熱心派52%、不熱心派43%)、「体力に自信がある」(51%、34%)、「バイタリティーがある」(76%、62%)と、運動能力や体力に関する項目が多い。女子では、「運動神経がよい」(43%、28%)、「体力に自信がある」(50%、32%)、

「リーダーシップがある」(41%、30%)といった運動能力やリーダーシップに対し自信を持つようになる。

このように、高校時代のクラブ・部活動の経験は、大学に入ってからの運動や体力、リーダーシップへの自信につながると言えよう。

### 3. 高校時代の読書体験

高校時代に小説やいろいろな本を「よく」あるいは「かなり読んだ」者は43%、「あまり」あるいは「ぜんぜん読まなかった」者は57%である(前掲表13)。

表22は、高校時代の読書体験の有無が大学生活への満足度や自己像に関して差が出た項目を示したものである。

高校時代に読書好きだった者は、自分に適した学部に入学し、大学の雰囲気や講義内容、

教授との接触に満足し、男子では異性とのつきあい、友だちづきあいもうまくいくという傾向が表れている。女子の場合は、読書好きな学生は、運動能力や異性関係に対する自信がないという傾向も見られる。高校時代の読書体験が大学生活の読書体験にはっきり影響していることもわかる。大学時代に本をよく読むかどうかは、高校時代に既に決まっているといっても過言ではない。

表22 高校時代の読書体験×大学生活・自己像

大学生活	高校時代の読書	(%)			
		男 子		女 子	
		読書した	読書しない	読書した	読書しない
サンプル平均		40.7	59.3	46.9	53.1
自分に適した学部に入学		60.5	>	54.3	51.5
大学の講義に満足		20.4	>	16.0	21.0
教授との接觸に満足		16.5	>	11.1	17.2
友だちづきあいに満足		58.6	>	50.0	54.6
運動神経がよい		48.7		45.9	37.5
異性にもてる		25.3		24.2	34.0
大学生としてよく読書をしている		66.2	>	24.0	26.6

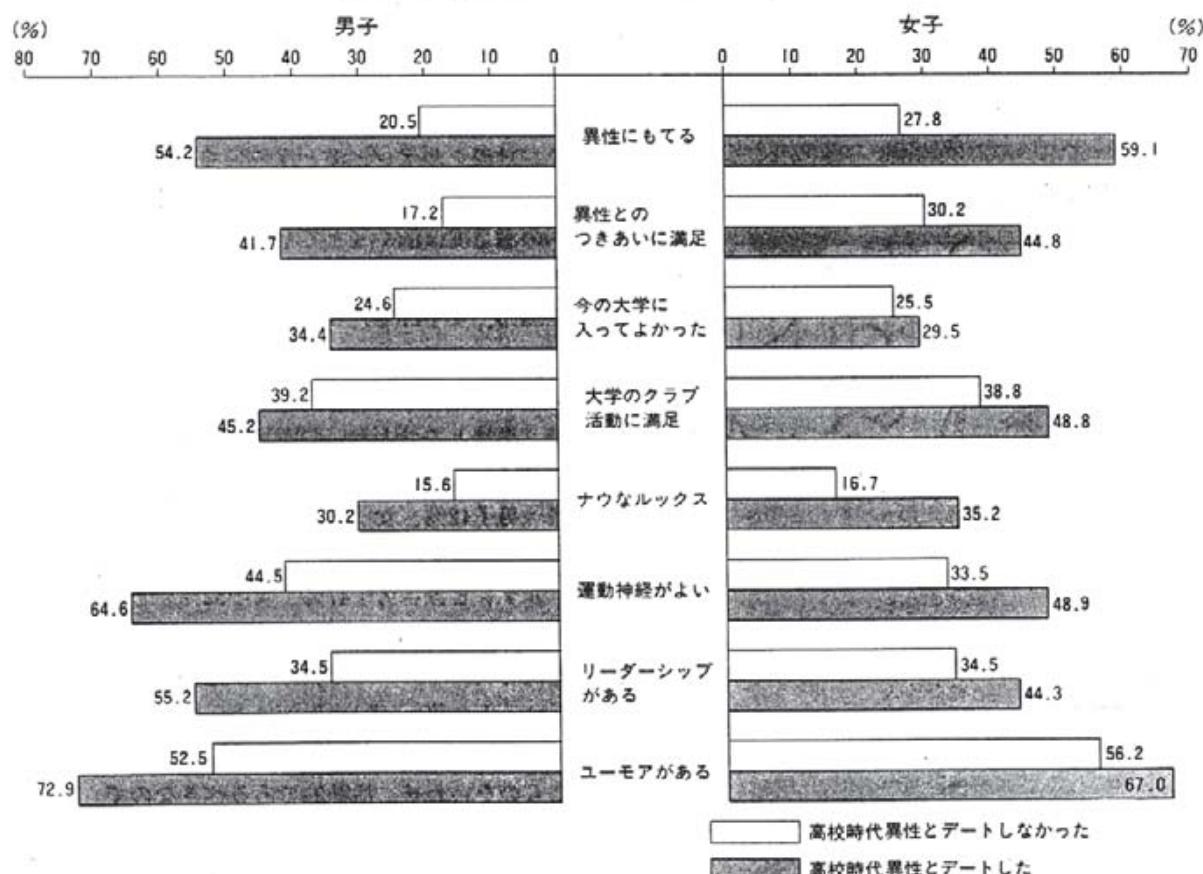
## 4. 高校時代の異性とのデート

高校時代の男女交際の経験は、青年期の人間形成にプラスに働く

高校時代に「異性とデートをする」ことが「よく」あるいは「かなりしたことがある」者は、13%いる（男子13%、女子13%）。それらを、デートを「あまり」あるいは「ぜんぜんしなかった」者（87%）と比較して、高校時代の男女交際の経験が、その後にどのように影響しているかを見てみよう。

高校時代の男女交際の経験は、大学での異性とのつきあいに充分生かされている。つまり図16のように、高校時代に男女交際の経験の多くある者はない者に比べて、大学生になっても異性にもてるという自信を持ち、異性

図16 高校時代のデートの経験×大学生活・自己像



とのつきあいにも満足している。逆に高校時代に男女交際の経験のない者は、大学生になつても異性に対して自信が持てず、異性とのつきあいの満足度が低い。大学生になってはじめて異性とのつきあいをすることは遅すぎるというのであろうか。

高校時代に異性とのデートの経験が多くある者はない者に比べ、今の大學生に入学した満足度が高く、大学のクラブ活動にも満足している。また自己像は、ナウなルックス、運動

神経がよい、ユーモアがある、リーダーシップを発揮できる、と、自分に対する自信をつけていく。

一般に高校時代の男女交際は、まだ早すぎると考えられ、親や教師も生徒に対しそれを奨励するより禁止する場合が多いであろう。しかし、高校時代の男女交際は青年期の人間形成に関して、決してマイナスに働いていないことを今回のデータは物語っている。

## 5. 高校時代のテレビ視聴

高校時代によくテレビを見た者は、大學への満足度は低く、バイタリティーがないなど、消極的な態度をとりがちである

高校時代にのんびりとテレビを見る「よくした」、あるいは「かなりした」というテレビ派は55%、「あまりしなかった」「ぜんぜんしなかった」の非テレビ派は45%いる。高校時代にテレビという受身的なメディアに多く接し、消極的な態度を身につけた高校生は、大学に入るとどうなるのであろうか。

テレビ派を非テレビ派と比較して、大学生活の特徴を見てみると、テレビ派は、今の大學生への満足度は低く（とても満足の割合；テレビ派=男子23%、女子25%、非テレビ派=男子33%、女子27%）、バイタリティーはなく（バイタリティーある；テレビ派=男子65%、女子65%、非テレビ派=男子73%、女子74%）、異性とのつきあいの満足度も低く（満足；テレビ派=男子18%、女子27%、非テレビ派=男子42%、女子45%）、本はあまり読まない（読む；テレビ派=男子37%、女子50%、非テレビ派=男子47%、女子52%）という消極的な態度や行動傾向をとりがちである。

高校時代にのんびりと受身的な生活を送ることは、その後(大学)の生活により影響を与えるとは言えない。したがって高校時代は若さにものをいわせ、活動的であるべきなのであろう。

以上、本章では高校生活と大学生活の関連を今回のデータから見てきた。

一人の人間にとって、高校時代の生活と大学時代の生活は無関係でありえず、大なり小なり後の生活(大学時代)は前の生活(高校時代)の影響を受けていることがわかった。つまり、高校時代と大学時代の生活を180度変えるということは難しく、大学時代の活動の準備を、高校時代にやっておかなければ大学に入ってからでは遅すぎるということが多くあることが、今回のデータからある程度明らかになった。

例えば、高校時代にろくすっぽ授業をきかなかった者が大学に入って急にまじめに勉強するようになるという可能性は少ない。また高校時代にクラブ活動に見向きもしなかった者が、大学の部活動で活躍する可能性も低い。高校時代に異性と無関係であった者は、大学に入って急に異性と親しくなれるわけではない。高校時代に本を読まなかった者は、大学に入ってからも本とは無縁な生活を送る。

つまり高校時代にやりたいこと、やるべきこと(発達課題)をある程度やって自分の能力・関心を啓発しておかないと、大学に入ってからでは遅すぎることが多々あるのである。将来を見越して現在の高校生活を有意義に過ごすことが大切と言えよう。それは、受験勉強のみに閉塞して、生き生きした興味や才能を潤らすことでは決してない。またテレビを見てのんびり過ごすことでもさらさらない。自分の能力や関心を見極め、それを充分に伸ばす活動を高校時代から積み上げることが大切なことがある。

大学に入って急に始めて遅すぎる  
ことが多くある。高校時代に行動や  
関心の萌芽を育てておくべきである

